
第19回 お試しアカウント付き
並列プログラミング講習会（試行）
「ライブラリ利用：高性能プログラミング初級入門」

東京大学情報基盤センター
スーパーコンピューティング部門

講習会概略

- ▶ **開催日:** 2011年12月21日(水)10:30 – 17:00
2011年12月22日(木)10:30 – 17:00
- ▶ **場所:** 東京大学情報基盤センター 4階 413遠隔講義室
- ▶ **講習会プログラム:**
- ▶ 12月21日(水)
 - ▶ 10:00 – 10:30 受付
 - ▶ 10:30 – 12:00 ノートパソコンの設定、テストプログラム(MPI)の実行など(演習)
(講師: 片桐)
 - ▶ 14:00 – 15:00 並列プログラミングの基本(座学)(講師: 片桐)
 - ▶ 15:15 – 17:00 プログラム実習 I (BLAS)(演習)(講師: 片桐)
- ▶ 12月22日(木)
 - ▶ 10:30 – 12:30 プログラミング実習 II (LAPACK, ScaLAPACK)(演習)(講師: 片桐)
 - ▶ 14:00 – 15:30 プログラミング実習 III (Lis)(演習)(講師: 伊藤)
 - ▶ 15:45 – 17:00 線形代数の基礎(座学)(講師: 伊藤)

有償トライアルユース制度の開始について

- ▶ 2011年6月より、安価に当センターのスーパーコンピュータHA8000クラスシステムが使える「有償トライアルユース」制度を開始しました。
 - ▶ アカデミック利用
 - ▶ パーソナルコース、専用キューコースの双方(1ヶ月～3ヶ月)
 - ▶ 企業利用
 - ▶ パーソナルコース(1ヶ月～3ヶ月)(4ノード、8ノード)
本講習会の受講が必須
 - ▶ 専用キューコース(1ヶ月～3ヶ月)(8ノード)
スーパーコンピュータ利用資格者審査委員会での審査が必要
(年4回実施。次回締切日:9月9日)
 - ▶ 双方のコースともに、簡易な利用報告書の提出が必要
- ▶ 料金体系など詳細は、以下のHPをご覧ください
http://www.cc.u-tokyo.ac.jp/use_info/trial/

スパコンへのログイン・ テストプログラム起動

東京大学情報基盤センター 准教授 片桐孝洋

講義の流れ

1. スパコン利用の仕方
 - ▶ 単純な並列プログラムの実行
2. 総和演算

テストプログラム起動

UNIX備忘録

- ▶ Emacsの起動: `emacs` <編集ファイル名>
 - ▶ `^x ^s` (^はcontrol) : テキストの保存
 - ▶ `^x ^c` : 終了
(`^z` で終了すると、スパコンの負荷が上がる。絶対にしないこと。)
 - ▶ `^g` : 訳がわからなくなったとき。
 - ▶ `^k` : カーソルより行末まで消す。
消した行は、一時的に記憶される。
 - ▶ `^y` : `^k`で消した行を、現在のカーソルの場所にコピーする。
 - ▶ `^s 文字列` : 文字列の箇所まで移動する。
 - ▶ `^M goto-line` : 指定した行まで移動する。
(`^M`はESCキーを押す)

UNIX 備忘録

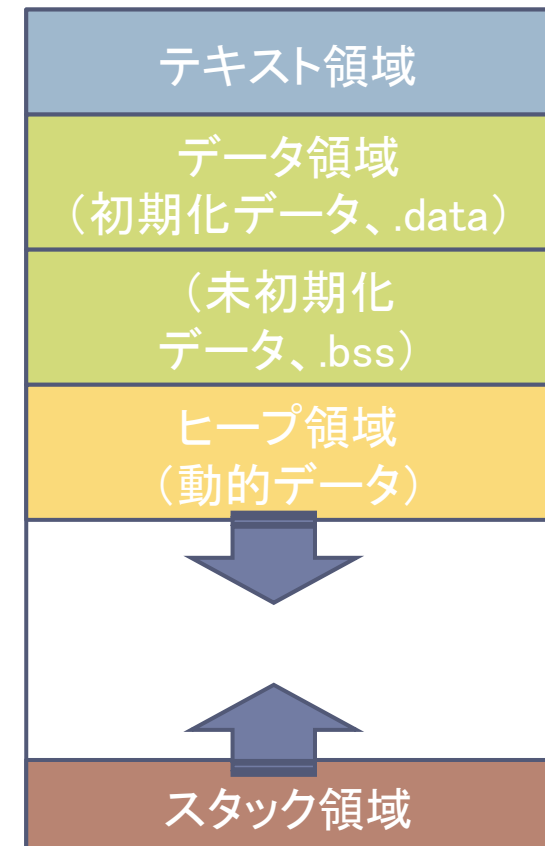
- ▶ **rm ファイル名** : ファイル名のファイルを消す。
 - ▶ **rm ***~ : test.c~ などの、~がついたバックアップファイルを消す。
- ▶ **ls** : 現在いるフォルダの中身を見る。
- ▶ **cd フォルダ名** : フォルダに移動する。
 - ▶ **cd ..** : 一つ上のフォルダに移動。
 - ▶ **cd ~** : ホームディレクトリに行く。訳がわからなくなったとき。
- ▶ **cat ファイル名** : ファイル名の中身を見る
- ▶ **make** : 実行ファイルを作る
(Makefile があるところでしか実行できない)
 - ▶ **make clean** : 実行ファイルを消す。
(clean がMakefileで定義されていないと実行できない)

役に立つコマンド

1. 実行ファイルが使用するメモリ量を見る

\$ size -f <実行ファイル名>

- ▶ .text + .data + .bss などの情報が見れます
- ▶ HA8000の場合、1ノードでの物理メモリ上限は32GB（実際は28GB程度）です
- ▶ malloc()関数で動的メモリ確保される場合はsizeコマンドではわかりません。
ただし、動的確保されるメモリ量が1ノードで処理できる物理サイズを超えると、システムがハングアップしますので、ご注意ください。



サンプルプログラムの実行

初めての並列プログラムの実行

サンプルプログラムについて

- ▶ C言語版

lec2011HA<サンプルプログラム名>C.tar

- ▶ Fortran版

lec2011HA<サンプルプログラム名>F.tar

- ▶ 上記のファイルが置いてある場所

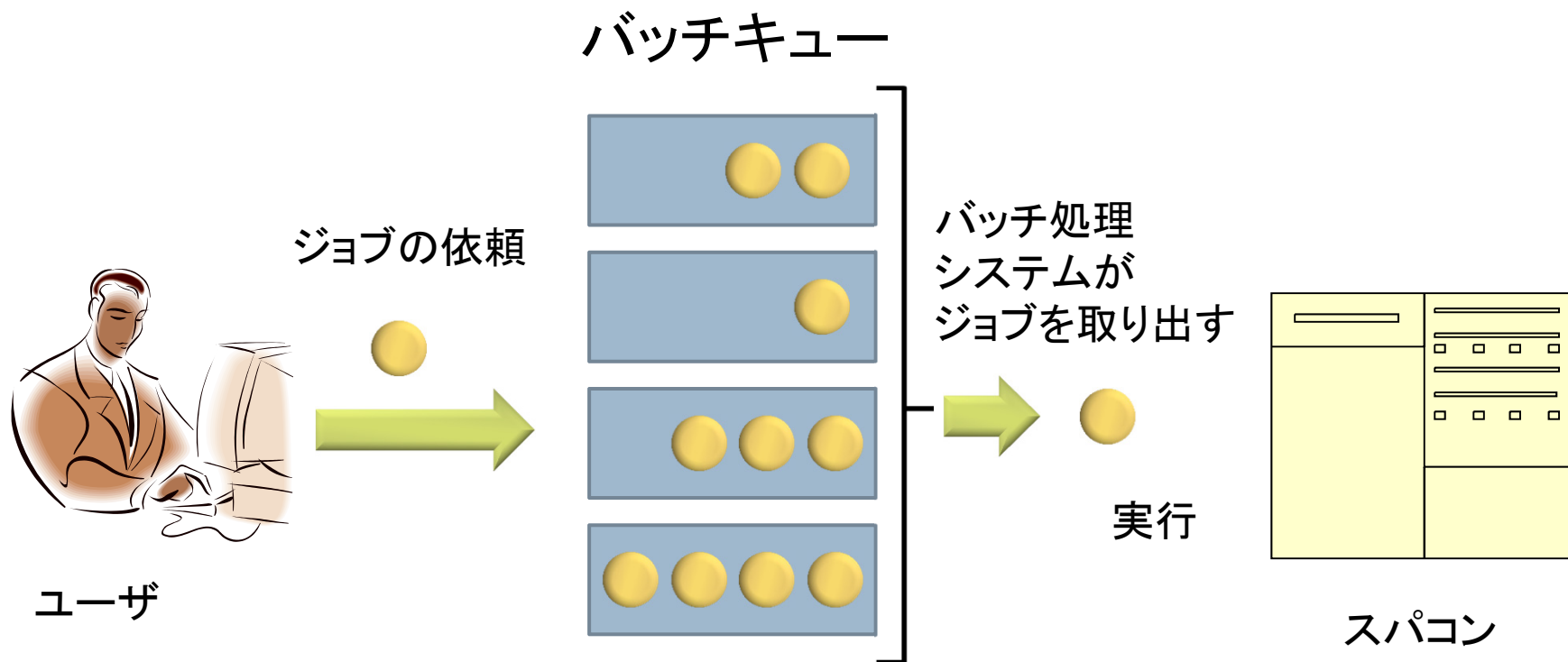
/home/z30082

並列版Helloプログラムをコンパイルしよう

1. `/home/z30082` にある `lec2011HAsamplesC.tar` を
自分のディレクトリにコピーする
`$ cp /home/z30082/lec2011HAsamplesC.tar ./`
2. `lec2011HAsamplesC.tar` を展開する
`$ tar xvf lec2011HAsamplesC.tar`
3. `Hello` フォルダに入る
`$ cd Hello`
4. ピュアMPI用のMakefileをコピーする
`$ cp Makefile_pure Makefile`
5. `make` する
`$ make`
6. 実行ファイル(hello)ができていることを確認する
`$ ls`

バッチ処理とは

- ▶ スパコン環境では、インタラクティブ実行(コマンドラインで実行すること)はできません。
- ▶ ジョブは**バッチ処理**で実行します。



NQSキューの設定のしかた

- ▶ バッチ処理は、Network Queuing System(NQS)で管理されています。
- ▶ 以下、NQSの主要コマンドを説明します。
 - ▶ ジョブの投入: `qsub <ジョブスクリプトファイル名>`
 - ▶ 自分が投入したジョブの状況確認: `qstat`
 - ▶ 混雑度を見る: `qstat -b`
 - ▶ 投入ジョブの削除: `qdel <ジョブID>`
 - ▶ 実行中のジョブの削除: `qdel -k <ジョブID>`
- ▶ 本演習のNQSキュー名: `tutorial`
 - ▶ 最大15分までの実行を許可
 - ▶ 最大ノード数は4(64コア)

NQSキューの種類

- ▶ “**qstat -b**” と入力すると
キューの種類を見ることができます
- ▶ **tutorial** :
本講習会時間内で使えるキュー
- ▶ **lecture** :
本講習会時間外で使えるキュー

qstat -b の実行画面例

```
[t00002@ha8000-2 Hello]$ qstat -b
2011/07/17 (Sun) 11:49:48:  BATCH QUEUES on HA8000 cluster
NQS schedule stop time : 2011/07/22 (Fri) 8:55:00 (Remain: 117h 5m 12s)
QUEUE NAME    STATUS  TOTAL  RUNNING  RUNLIMIT  QUEUED  HELD  IN-TRANSIT
debug         AVAILBL  0      0         4         0       0      0
profile       AVAILBL  0      0         1         0       0      0
avs           AVAILBL  0      0         1         0       0      0
tutorial      AVAILBL  0      0         1         0       0      0
lecture       AVAILBL  0      0         2         0       0      0
```

↑
使える
キュー名

↑
現在
使えるか

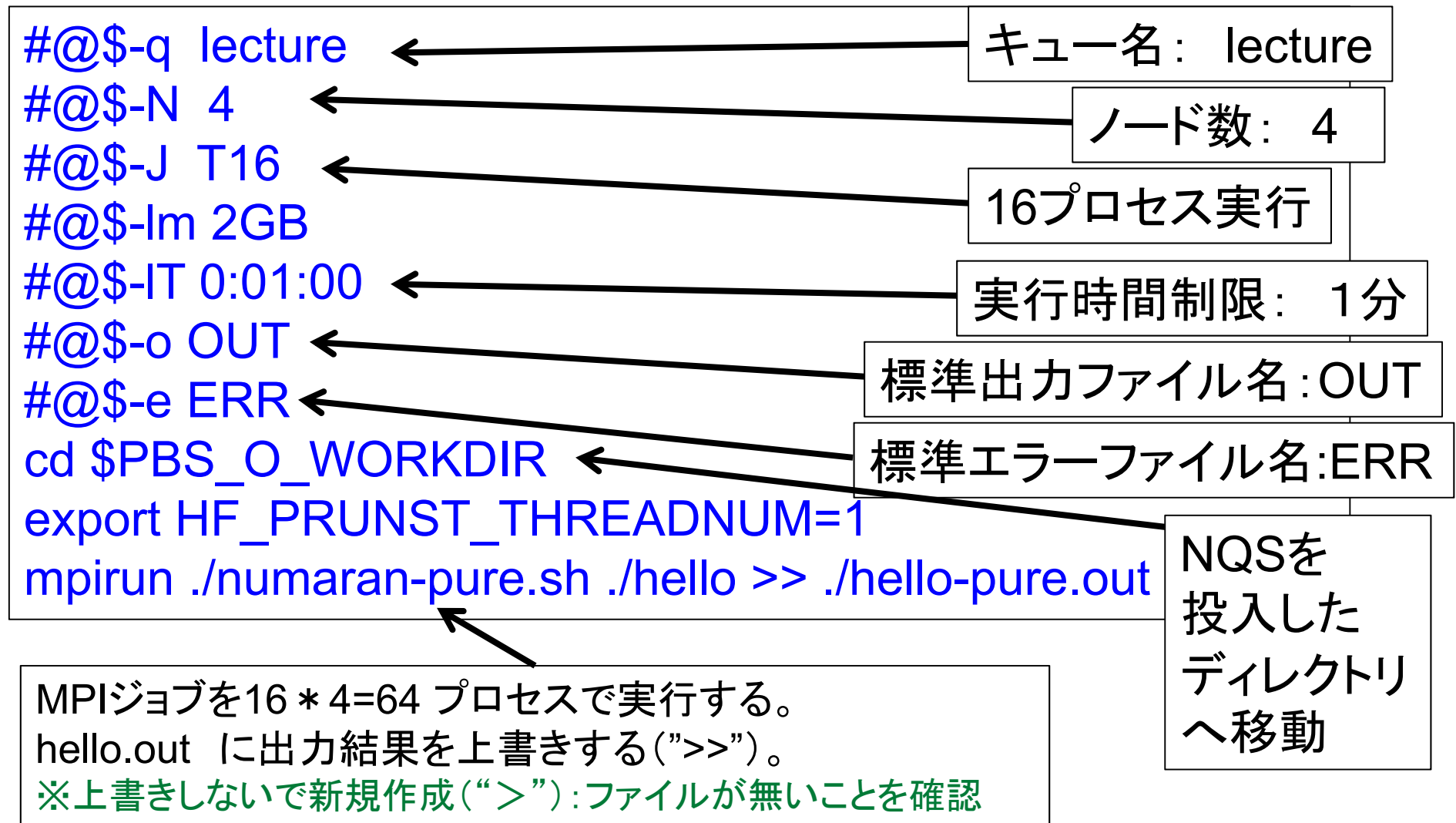
↑
キュー
に投入
されて
いる
ジョブ
の総数

↑
同時
実行
数の
上限

↑
待たされ
ている
ジョブの
数

↑
システムが
落ちるまで
の残り時間。
これ以上
長い実行
時間を指定
したら、実行
されない。

JOBスクリプトサンプルの説明（ピュアMP I） （C言語、Fortran言語共通）



numaran-pure.shの中身 (ピュアMPI)

(C言語、Fortran言語共通)

```
#!/bin/bash
MYRANK=$MXMPI_ID
MYVAL=$(expr $MYRANK / 4)
NODE=$(expr $MYVAL % 4)
numactl --cpunodebind=$NODE --membind=$NODE $@
```

MPIのランク番号を取得

ソケット内に4プロセスを配置

ソケット番号を計算

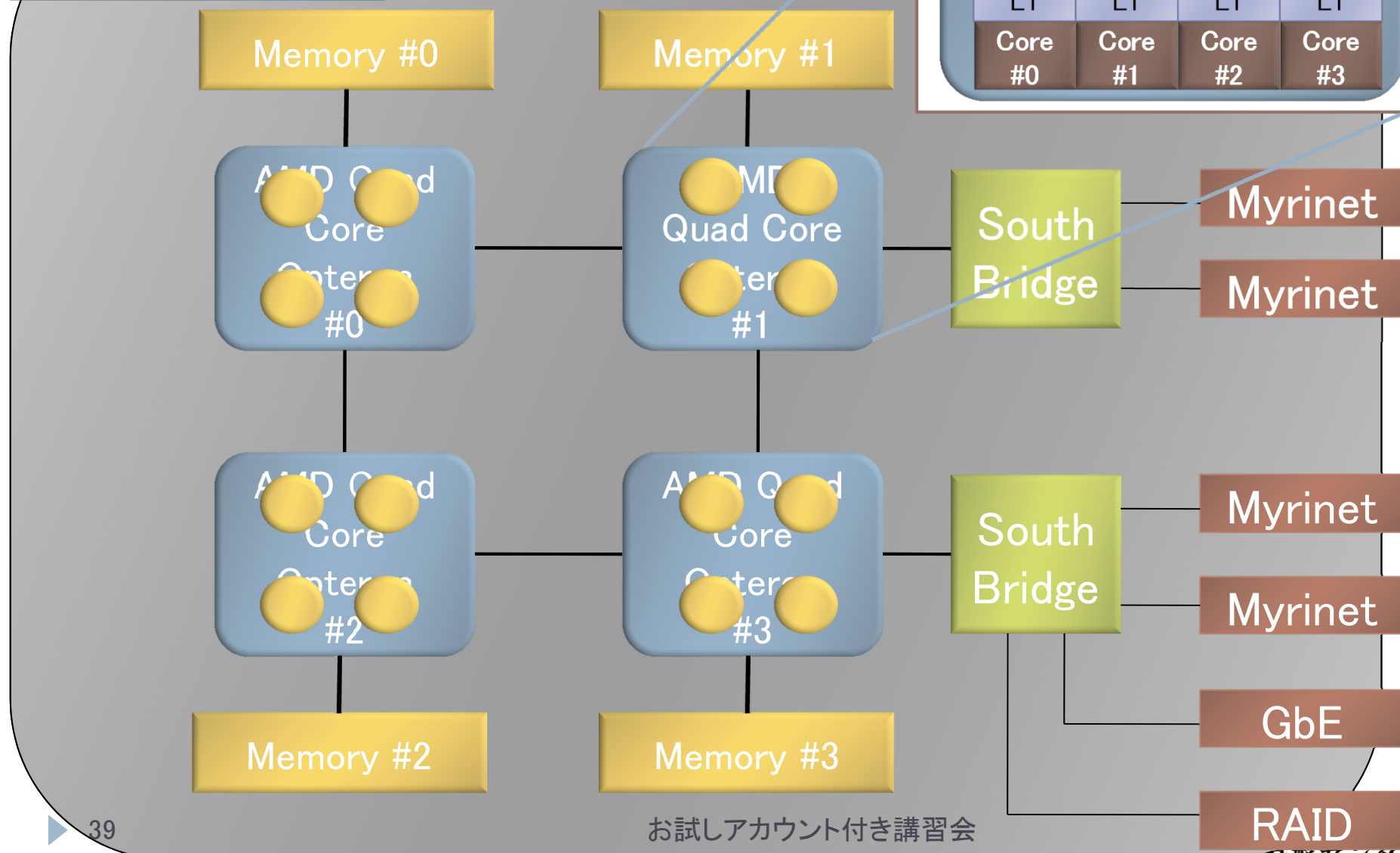
プロセスの割り当てソケットと
メモリ確保先のソケットを
指定

ピュアMPIの実行状況(ノード内)

● MPIプロセス

各CPUの内部構成

L3			
L2	L2	L2	L2
L1	L1	L1	L1
Core #0	Core #1	Core #2	Core #3



並列版Helloプログラムを実行しよう (ピュアMPI)

- ▶ このサンプルのJOBスクリプトは
`hello-pure.bash`
です。
- ▶ 配布のサンプルでは、キュー名
が“`lecture`”になっています
- ▶ `$ emacs hello-pure.bash`
で、“`lecture`” → “`tutorial`” に
変更してください

並列版Helloプログラムを実行しよう (ピュアMPI)

1. Helloフォルダ中で以下を実行する
`$ qsub hello-pure.bash`
2. 自分の導入されたジョブを確認する
`$ qstat`
3. 実行が終了すると、以下のファイルが生成される
`hello-pure.out`
4. 上記ファイルの中身を見してみる
`$ cat hello-pure.out`
5. “Hello parallel world!”が、16プロセス*4ノード=64表示されていたら成功。

NQSに関連するTIPS

- ▶ NQS ジョブが実行されるとき、およびNQSジョブが終了したとき、には電子メールが送られてくる。
- ▶ このメールを読むときは、以下のようにする。
 > mail
- ▶ なお、コマンドは以下のとおりです。
 - ▶ 番号: メールの表示 Ex. >2
 - ▶ h: メール一覧表示
 - ▶ s: ファイルへ保存 Ex. > s file
 - ▶ d: メールの削除 Ex. > d 1
 - ▶ x: コマンドの終了(何もしない)
 - ▶ q: コマンドの終了(mboxへ保存)
- ▶ ほかのメールアドレスに飛ばしたい場合は、
 ha8000-1.cc.u-tokyo.ac.jp でforward ファイル中にアドレスを記述

並列版Helloプログラムをコンパイルしよう (**ハイブリッドMPI**、C言語、Fortran言語共通)

1. ハイブリッドMPI用の Makefile をコピーする。
`$ cp Makefile_hy4 Makefile`
2. make する。
`$ make clean`
`$ make`
3. 実行ファイル(hello)ができていることを確認する。
`$ ls`
4. JOBスクリプト中(hello-hy4.bash)のキュー名を変更する。“lecture” → “tutorial”に変更する。
`$ emacs hello-hy4.bash`

並列版Helloプログラムを実行しよう

(ハイブリッドMPI、C言語、Fortran言語共通)

1. Helloフォルダ中で以下を実行する
`$ qsub hello-hy4.bash`
2. 自分の導入されたジョブを確認する
`$ qstat`
3. 実行が終了すると、以下のファイルが生成される
`hello-hy4.out`
4. 上記ファイルの中身を見してみる
`$ cat hello-hy4.out`
5. “Hello parallel world!”が、4プロセス*4ノード=16
表示されていたら成功。

JOBスクリプトサンプルの説明 (ハイブリッドMPI) (C言語、Fortran言語共通)

```
#@$-q lecture
```

キュー名: lecture

```
#@$-N 4
```

ノード数: 4

```
#@$-J T4
```

4プロセス実行

```
#@$-lm 2GB
```

```
#@$-IT 0:01:00
```

実行時間制限: 1分

```
#@$-o OUT
```

標準出力ファイル名: OUT

```
#@$-e ERR
```

標準エラーファイル名: ERR

```
cd $PBS_O_WORKDIR
```

```
export HF_PRUNST_THREADNUM=4
```

NQSを投入
したディレクトリ
へ移動

```
mpirun ./numaran-4.sh ./hello >> ./hello-hy4.out
```

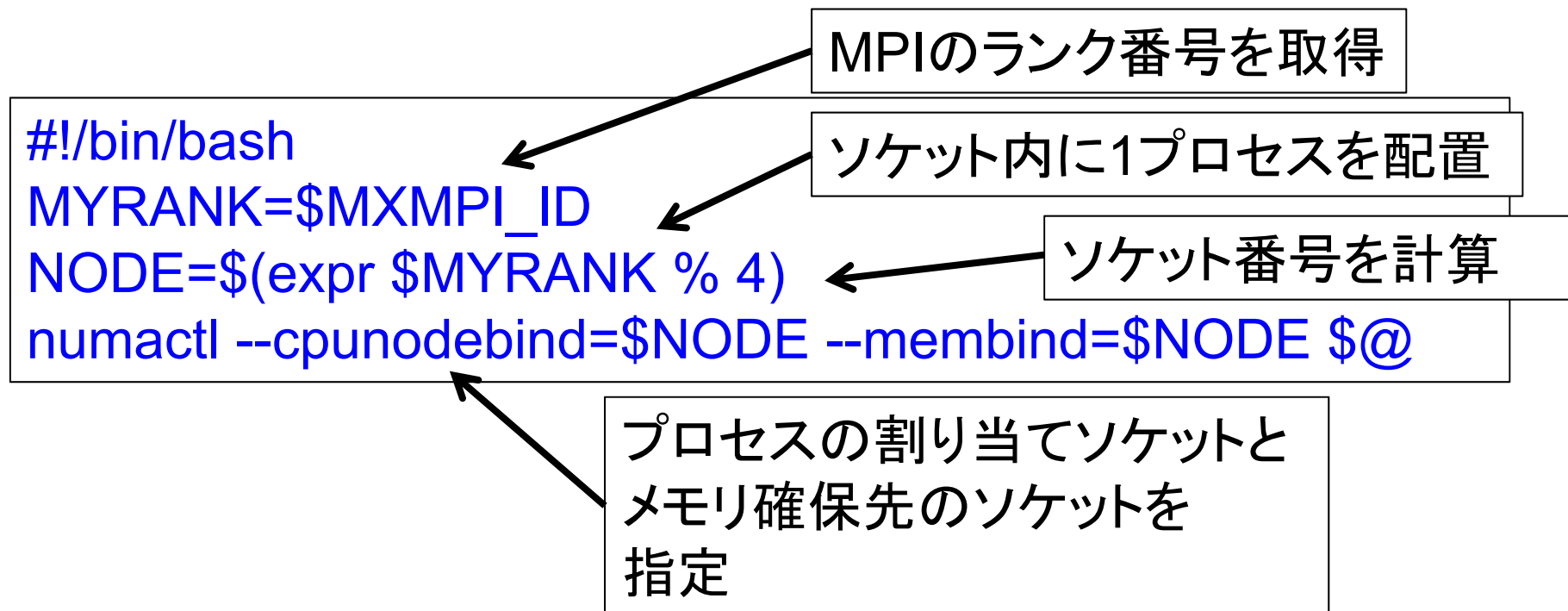
MPIジョブを16プロセスで実行する。

hello.out へ出力結果を上書きする(">>")。

※上書きしないで新規作成(">"):ファイルが無いことを確認

スレッド数(起動プロ
セス数を含む)の指定

numaran-4.shの中身 (ハイブリッドMPI I) (C言語、Fortran言語共通)



ハイブリッドMPIの実行状況(ノード内)

- MPIプロセス
- スレッド

各CPUの内部構成

L3			
L2	L2	L2	L2
L1	L1	L1	L1
Core #0	Core #1	Core #2	Core #3

Memory #0

Memory #1

Quad Core Opteron #0

Quad Core Opteron #1

South Bridge

Myrinet

Myrinet

Quad Core Opteron #2

Quad Core Opteron #3

South Bridge

Myrinet

Myrinet

Memory #2

Memory #3

GbE

RAID

並列版Helloプログラムの説明（C言語）

このプログラムは、全PEで起動される

```
#include <stdio.h>
#include <mpi.h>
```

```
void main(int argc, char* argv[]) {
```

```
    int  myid, numprocs;
    int  ierr, rc;
```

```
    ierr = MPI_Init(&argc, &argv);
    ierr = MPI_Comm_rank(MPI_COMM_WORLD, &myid);
    ierr = MPI_Comm_size(MPI_COMM_WORLD, &numprocs);
```

```
    printf("Hello parallel world! Myid:%d ¥n", myid);
```

```
    rc = MPI_Finalize();
```

```
    exit(0);
```

```
}
```

MPIの初期化

自分のID番号を取得
:各PEで値は異なる

全体のプロセッサ台数
を取得

:各PEで値は同じ
(演習環境では
64、もしくは16)

MPIの終了

並列版Helloプログラムの説明 (Fortran言語)

このプログラムは、全PEで起動される

```
program main  
include 'mpif.h'  
common /mpienv/myid,numprocs
```

```
integer myid, numprocs  
integer ierr
```

```
call MPI_INIT(ierr)  
call MPI_COMM_RANK(MPI_COMM_WORLD, myid, ierr)  
call MPI_COMM_SIZE(MPI_COMM_WORLD, numprocs, ierr)
```

```
print *, "Hello parallel world! Myid:", myid
```

```
call MPI_FINALIZE(ierr)
```

```
stop  
end
```

MPIの初期化

自分のID番号を取得
: 各PEで値は異なる

全体のプロセッサ台数
を取得
: 各PEで値は同じ
(演習環境では
64、もしくは16)

MPIの終了

時間計測方法 (C言語)

```
double t0, t1, t2, t_w;  
..  
ierr = MPI_Barrier(MPI_COMM_WORLD);  
t1 = MPI_Wtime();
```

<ここに測定したいプログラムを書く>

```
ierr = MPI_Barrier(MPI_COMM_WORLD);  
t2 = MPI_Wtime();
```

```
t0 = t2 - t1;  
ierr = MPI_Reduce(&t0, &t_w, 1,  
    MPI_DOUBLE, MPI_MAX, 0,  
    MPI_COMM_WORLD);
```

バリア同期後
時間を習得し保存

各プロセッサで、t0の値は
異なる。
この場合は、最も遅いものの
値をプロセッサ0番が受け取る

時間計測方法 (Fortran言語)

```
double precision t0, t1, t2, t_w  
double precision MPI_WTIME
```

```
..  
call MPI_BARRIER(MPI_COMM_WORLD, ierr)  
t1 = MPI_WTIME(ierr)
```

<ここに測定したいプログラムを書く>

```
call MPI_BARRIER(MPI_COMM_WORLD, ierr)  
t2 = MPI_WTIME(ierr)
```

```
t0 = t2 - t1  
call MPI_REDUCE(t0, t_w, 1,  
& MPI_DOUBLE_PRECISION,  
& MPI_MAX, 0, MPI_COMM_WORLD, ierr)
```

バリア同期後
時間を習得し保存

各プロセッサで、t0の値
は異なる。

この場合は、最も遅いも
のの値をプロセッサ0番
が受け取る

任意のプロセス数での実行方法 (東大センタ限定)

- ▶ 以下のように、*.bashファイルを修正してください
 - ▶ 2プロセス／ノードでの実行
#@ \$-J T2
 - ▶ 4プロセス／ノードでの実行
#@ \$-J T4
 - ▶ pプロセス／ノードでの実行
#@ \$-J Tp
- ▶ 実習環境では、1～16プロセス／ノードまで
しかないことに注意

MPIサンプルプログラムの実行 (演習)

東京大学情報基盤センター 准教授 片桐孝洋

実習課題

サンプルプログラムの説明

- ▶ **Hello/**
 - ▶ 並列版Helloプログラム
 - ▶ `hello-pure.bash`, `hello-hy4.bash` : NQSジョブスクリプトファイル
- ▶ **Cpi/**
 - ▶ 円周率計算プログラム
 - ▶ `cpi-pure.bash` NQSジョブスクリプトファイル
- ▶ **Wa1/**
 - ▶ 逐次転送方式による総和演算
 - ▶ `wa1-pure.bash` NQSジョブスクリプトファイル
- ▶ **Wa2/**
 - ▶ 二分木通信方式による総和演算
 - ▶ `wa2-pure.bash` NQSジョブスクリプトファイル
- ▶ **Cpi_m/**
 - ▶ 円周率計算プログラムに時間計測ルーチンを追加したもの
 - ▶ `cpi_m-pure.bash` NQSジョブスクリプトファイル

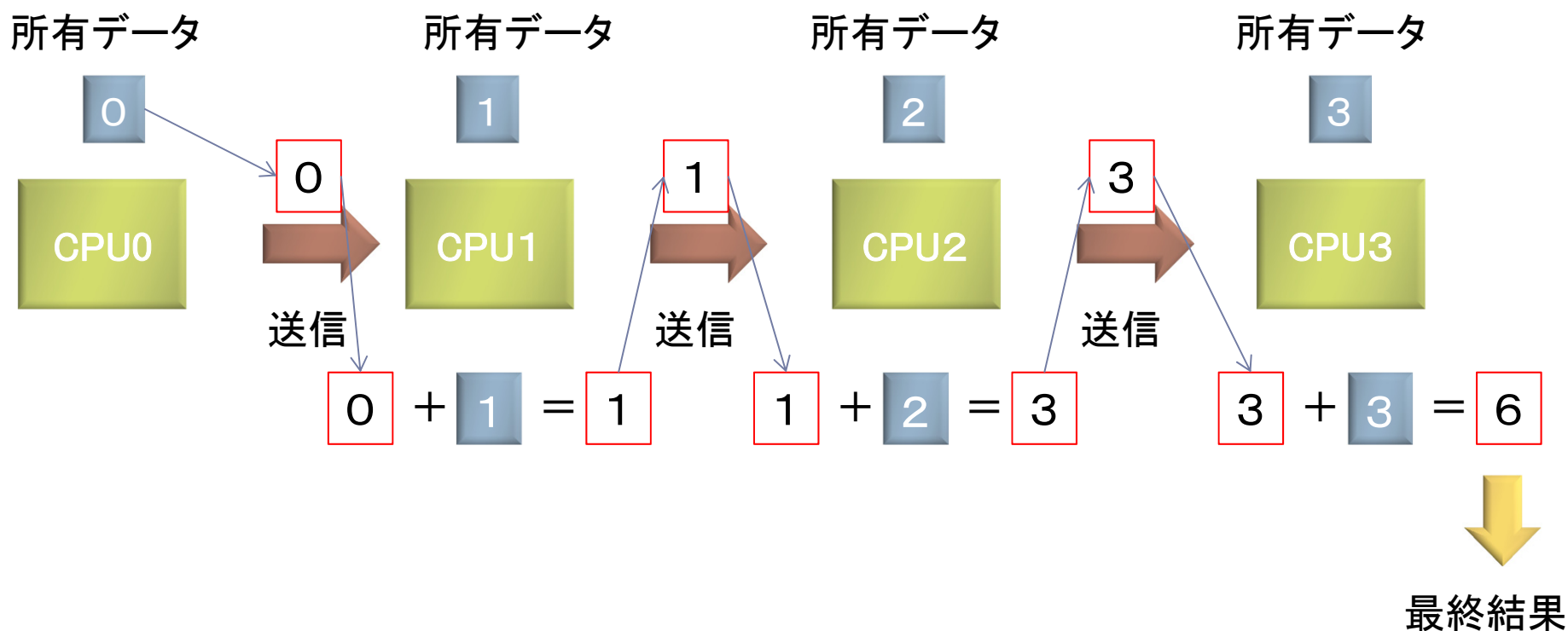
演習課題

1. 逐次転送方式のプログラムを実行
 - ▶ Wa1 のプログラム
2. 二分木通信方式のプログラムを実行
 - ▶ Wa2のプログラム
3. 時間計測プログラムを実行
 - ▶ Cpi_mのプログラム
4. プロセス数を変化させて、サンプルプログラムを実行
5. Helloプログラムを、以下のように改良
 - ▶ MPI_Sendを用いて、PE0からChar型のデータ
“Hello World!!”を、その他のPEに送信する
 - ▶ その他のPEでは、MPI_Recvで受信して表示する

総和演算プログラム（逐次転送方式）

- ▶ 各プロセスが所有するデータを、全プロセスで加算し、あるプロセス1つが結果を所有する演算を考える。
- ▶ 素朴な方法（逐次転送方式）
 1. (0番でなければ)左隣のプロセスからデータを受信する;
 2. 左隣のプロセスからデータが来ていたら;
 1. 受信する;
 2. **<自分のデータ>**と**<受信データ>**を加算する;
 3. (63番でなければ)右隣のプロセスに**<2の加算した結果を>**送信する;
 4. 処理を終了する;
- ▶ 実装上の注意
 - ▶ 左隣りとは、 $(myid-1)$ のIDをもつプロセス
 - ▶ 右隣りとは、 $(myid+1)$ のIDをもつプロセス
 - ▶ $myid=0$ のプロセスは、左隣りはないので、受信しない
 - ▶ $myid=p-1$ のプロセスは、右隣りはないので、送信しない

バケツリレー方式による加算



1 対 1 通信利用例 (逐次転送方式、C言語)

```
void main(int argc, char* argv[]) {
    MPI_Status istatus;
    ....
    dsendbuf = myid;
    drecvbuf = 0.0;
    if (myid != 0) {
        ierr = MPI_Recv(&drecvbuf, 1, MPI_DOUBLE, myid-1, 0,
            MPI_COMM_WORLD, &istatus);
    }
    dsendbuf = dsendbuf + drecvbuf;
    if (myid != nprocs-1) {
        ierr = MPI_Send(&dsendbuf, 1, MPI_DOUBLE, myid+1, 0,
            MPI_COMM_WORLD);
    }
    if (myid == nprocs-1) printf ("Total = %4.2lf ¥n", dsendbuf);
    ....
}
```

受信用システム配列の確保

自分より一つ少ない
ID番号(myid-1)から、
double型データ1つを
受信しdrecvbuf変数に
代入

自分より一つ多い
ID番号(myid+1)に、
dsendbuf変数に入っ
ているdouble型データ
1つを送信

1 対 1 通信利用例

(逐次転送方式、Fortran言語)

```
program main
integer istatus(MPI_STATUS_SIZE)
....
dsendbuf = myid
drecvbuf = 0.0
if (myid .ne. 0) then
  call MPI_RECV(drecvbuf, 1, MPI_DOUBLE_PRECISION,
&             myid-1, 0, MPI_COMM_WORLD, istatus, ierr)
endif
dsendbuf = dsendbuf + drecvbuf
if (myid .ne. numprocs-1) then
  call MPI_SEND(dsendbuf, 1, MPI_DOUBLE_PRECISION,
&             myid+1, 0, MPI_COMM_WORLD, ierr)
endif
if (myid .eq. numprocs-1) then
  print *, "Total = ", dsendbuf
endif
....
stop
end
```

受信用システム配列の確保

自分より一つ少ない
ID番号(myid-1)から、
double型データ1つを
受信しdrecvbuf変数に
代入

自分より一つ多い
ID番号(myid+1)に、
dsendbuf変数に
入っているdouble型
データ1つを送信

総和演算プログラム（二分木通信方式）

▶ 二分木通信方式

1. $k = 1;$
2. for ($i=0; i < \log_2(nprocs); i++$)
3. if ($(myid \& k) == k$)
 - ▶ $(myid - k)$ 番 プロセス からデータを受信;
 - ▶ 自分のデータと、受信データを加算する;
 - ▶ $k = k * 2;$
4. else
 - ▶ $(myid + k)$ 番 プロセス に、データを転送する;
 - ▶ 処理を終了する;

総和演算プログラム（二分木通信方式）

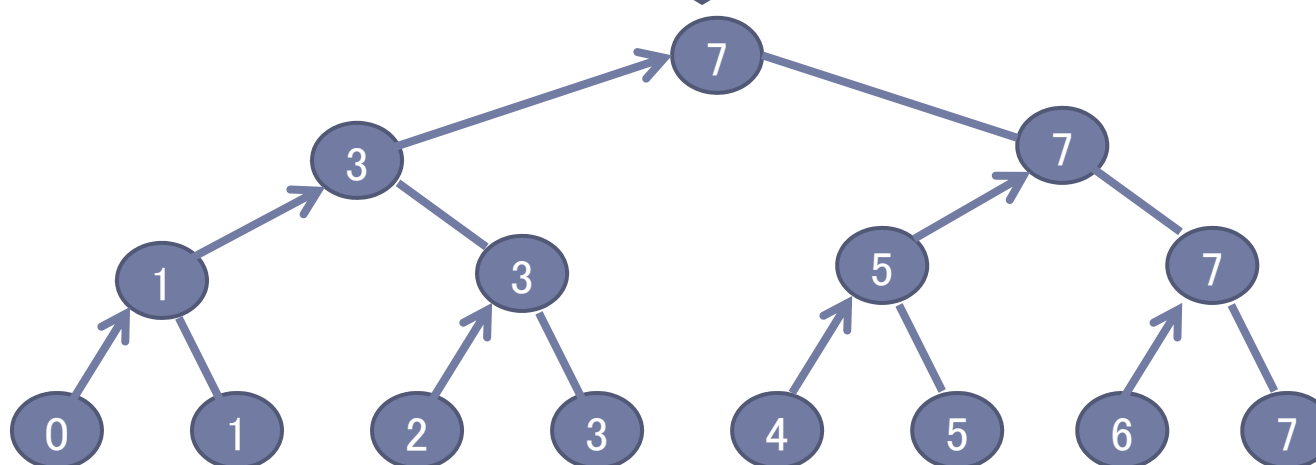
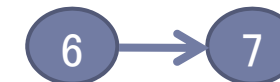
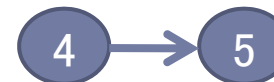
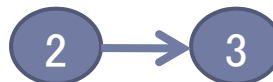
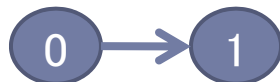
3段目 = $\log_2(8)$ 段目



2段目



1段目



総和演算プログラム（二分木通信方式）

▶ 実装上の工夫

- ▶ **要点:** プロセス番号の2進数表記の情報を利用する
- ▶ 第*i*段において、受信するプロセスの条件は、以下で書ける:
 $\text{myid} \ \& \ k \text{ が } k \text{ と一致}$
 - ▶ ここで、 $k = 2^{(i-1)}$ 。
 - ▶ つまり、プロセス番号の2進数表記で右から*i*番目のビットが立っているプロセスが、送信することにする
- ▶ また、送信元のプロセス番号は、以下で書ける:
 $\text{myid} + k$
 - ▶ つまり、通信が成立するPE番号の間隔は $2^{(i-1)}$ ←二分木なので
- ▶ 送信プロセスについては、上記の逆が成り立つ。

総和演算プログラム（二分木通信方式）

- ▶ 逐次転送方式の通信回数
 - ▶ 明らかに、 $nprocs - 1$ 回
- ▶ 二分木通信方式の通信回数
 - ▶ 見積もりの前提
 - ▶ 各段で行われる通信は、完全に並列で行われる（通信の衝突は発生しない）
 - ▶ 段数の分の通信回数となる
 - ▶ つまり、 $\log_2(nprocs)$ 回
- ▶ 両者の通信回数の比較
 - ▶ プロセッサ台数が増すと、通信回数の差（＝実行時間）がとても大きくなる
 - ▶ 1024構成では、1023回 対 10回！
 - ▶ でも、必ずしも二分木通信方式がよいとは限らない（通信衝突の多発）

参考資料

- ▶ HA8000用性能モニタについて(Fortranのみ)
 - ▶ 時間がかかる関数、並列化効率、FLOPS値の表示が可能になる
 - ▶ 東京大学情報基盤センター
スーパーコンピューティングニュース
Vol.12 No.6 (2010年11月)
 - ▶ (株)日立製作所
「HA8000 クラスタシステム性能モニタ機能の利用法」
- ▶ PDFへのリンク

[http://www.cc.utokyo.ac.jp/publication/news/
VOL12/No6/ 201011_profile.pdf](http://www.cc.utokyo.ac.jp/publication/news/VOL12/No6/201011_profile.pdf)

並列プログラミングの基礎（座学）

東京大学情報基盤センター 准教授 片桐孝洋

2011年12月21日(水) 14:00－15:00

お試しアカウント付き講習会

本講義の流れ

1. 東大スーパーコンピュータの概略
2. 並列プログラミングの基礎
3. 性能評価指標
4. データ分散方式
5. ベクトルどうしの演算
6. ベクトル-行列積

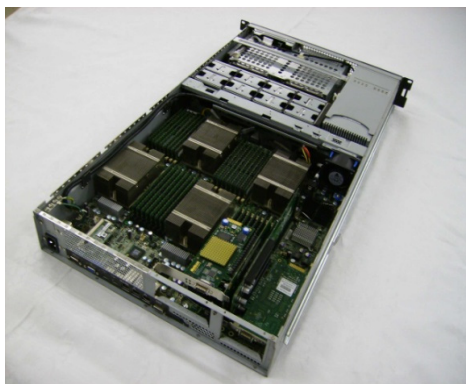
東大スーパーコンピュータの概略

東京大学情報基盤センター スパコン (1 / 2)

T2K東大(HA8000クラスタシステム)

Total Peak performance	: 140 TFLOPS
Total number of nodes	: 952
Total memory	: 32000 GB
Peak performance per node	: 147.2 GFLOPS
Main memory per node	: 32 GB, 128 GB
Disk capacity	: 1 PB
AMD Quad Core Opteron 2.3GHz	

ノード製品名: HITACHI HA8000-tc/RS425



HITACHI SR16000 model M1

Total Peak performance	: 54.9 TFLOPS
Total number of nodes	: 56
Total memory	: 11,200 GB
Peak performance per node	: 980.48 GFLOPS
Main memory per node	: 200 GB
Disk capacity	: 556 TB
IBM POWER7 3.83GHz	

2011年12月運用開始



東京大学情報基盤センター スパコン (2 / 2)

Fujitsu PRIMEHPC FX10

Total Peak performance	: 1.13 PFLOPS
Total number of nodes	: 4,800
Total memory	: 150TB
Peak performance per node	: 236.5 GFLOPS
Main memory per node	: 32 GB
Disk capacity	: 2.1 PB
SPARC64 IXfx 1.848GHz	

2012年4月運用開始予定



T2Kオープンスパコン東大版

HA8000-tc/RS425クラスタ群

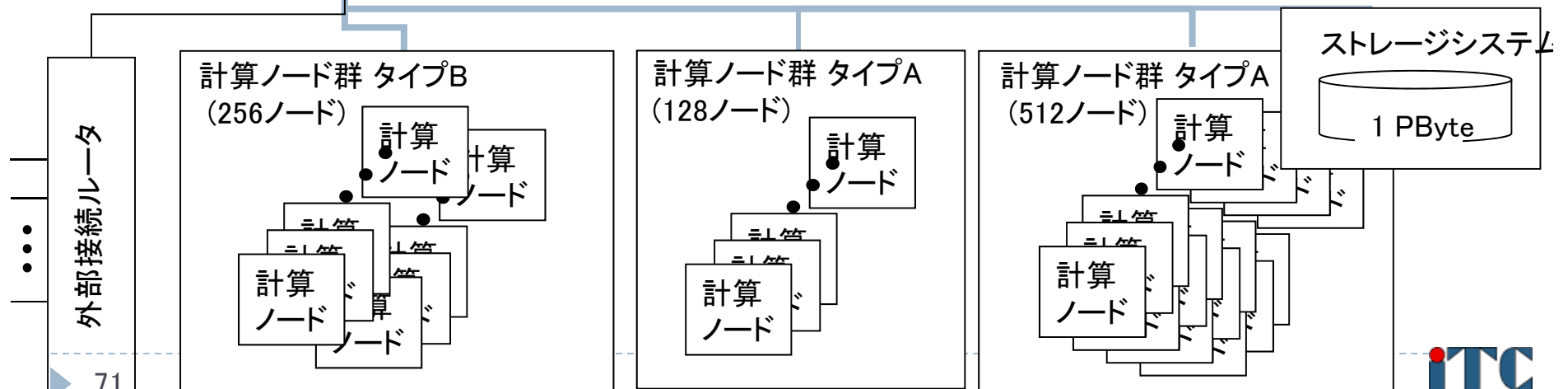
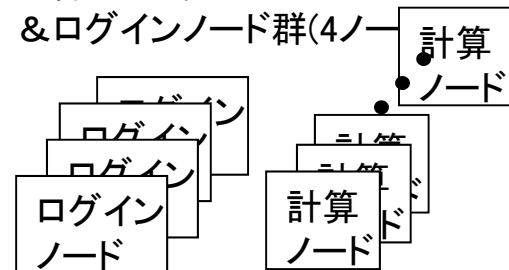
ノード単体仕様

CPU	AMD社製Quad Core Opteron 2.3 GHz
ソケット数 (CPU数)	4 (16)
理論演算性能	147.2 GFlops
主記憶容量	32 GByte (936ノード)、128GByte(16ノード)
ディスク	250 GByte

全体仕様

総理論演算性能	140.1344 TFlops
総主記憶容量	31.25 TByte
計算ノード数	948
ログインノード数	4
ネットワーク性能 (両方向物理データ転送性能)	タイプA(512, 128ノード) : 5 GByte/sec (Myrinet-10G x 4) タイプB(256, 36, 16) : 2.5 GByte/sec (Myrinet-10G x 2)
ファイルシステム容量	1 PByte
OS	RedHat Enterprise Linux 5
バッチジョブシステム	現有バッチジョブシステムと同様の機能が提供されます
コンパイラ	日立製作所社製最適化Fortran, C/C++ (OpenMP有)
通信ライブラリ	MPI通信ライブラリ (MPICH-MX)
数値計算ライブラリ	MSL2 MATRIX/MPP MATRIX/MPP/SSS BLAS, LAPACK, ScaLAPACK
アプリケーション	Gaussian03

計算ノード群タイプB (36 + 16 ノード)
& ログインノード群(4ノード)



お試しアカウント付き講習会

タイプA

ノード数	512, 128 (2つの群から構成)
ネットワーク性能	5 GB/sec (片方向) Full bisection bandwidth
CPU	AMD 社 製 Quad Core Opteron 2.3 GHz
ソケット数 (CPU数)	4 (16)
理論演算性能	147.2 GFlops
主記憶容量	32 GByte
ディスク	250 GByte

512ノード



128ノード

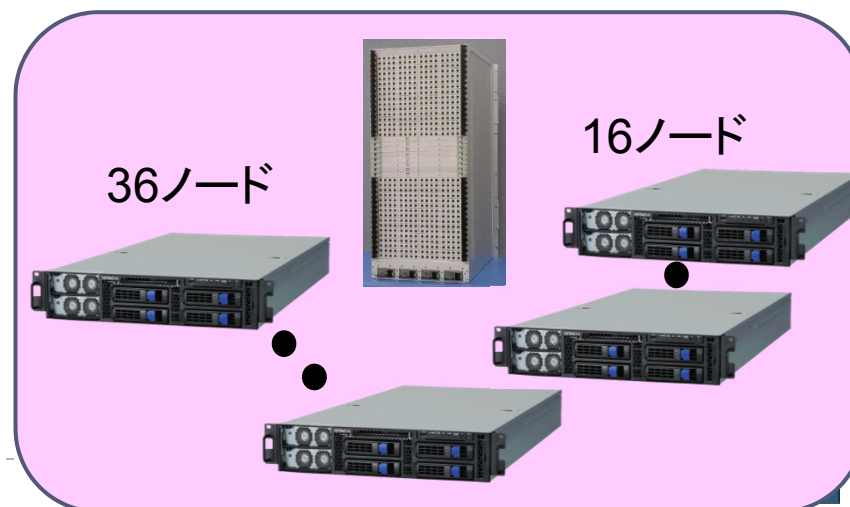
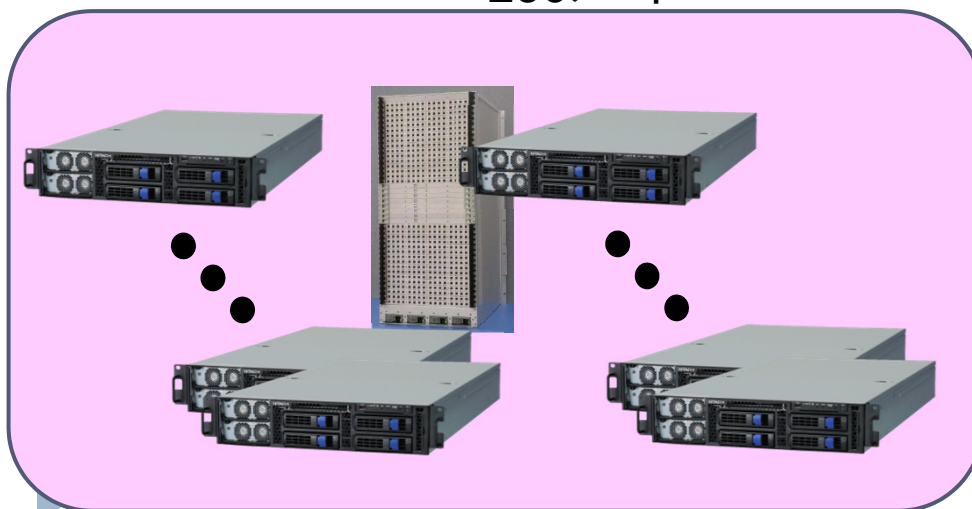


タイプB

ノード数	256, 36, 16 (3つの群から構成)
ネットワーク性能	2.5 GB/sec (片方向)
	Full bisection bandwidth
CPU	AMD社製Quad Core Opteron 2.3 GHz
ソケット数(CPU数)	4 (16)
理論演算性能	147.2 GFlops
主記憶容量	32 GByte (16ノードは128GByte)
ディスク	250 GByte

なお、ログインノード
4台の構成は36
ノードと同様です

256ノード



T2KオーブンスパコンCPU緒元

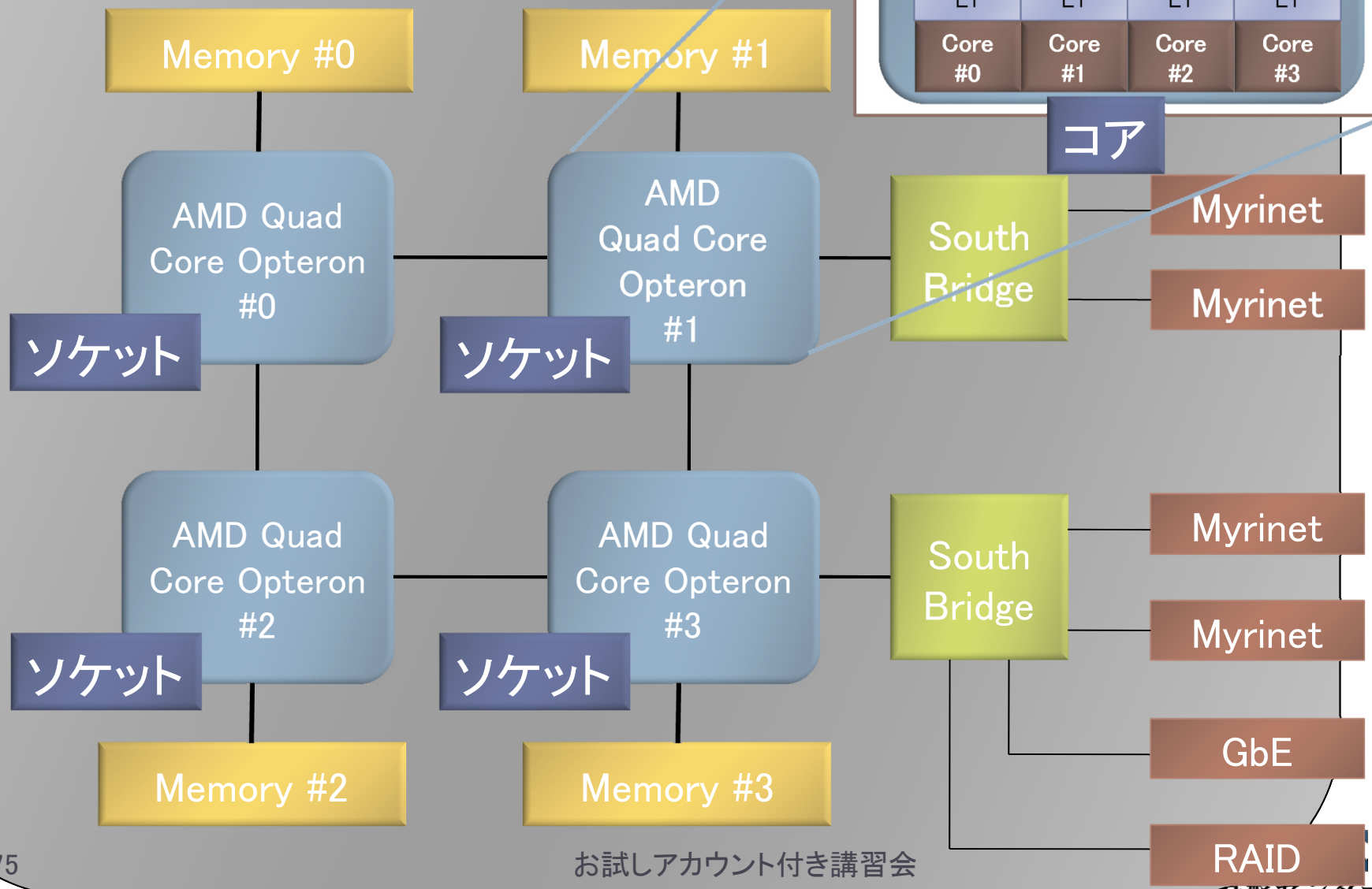
(AMD Quad Core Opteron 2.3GHz)

：東大、京大、筑波大に設置のスパコン

項目	値
L1キャッシュ	64 Kbytes (命令、データ、双方は分離) 2 Way Associativity(ライトバック、3サイクル) キャッシュライン:64 bytes、LRU置換
L1データTLB	Full Associativity 2Mbyte Page:8エントリ, 4Kbyte Page:32エントリ
L2キャッシュ	512 Kbytes (2300 MHz)
L3キャッシュ	2048 Kbytes
命令デコード	3 Way
演算実行	3 Way (整数、アドレス生成、浮動小数点)
SIMD命令実行	MMX, SSE, SSE2
命令実行	乱発行乱終了(Out-of-order) 整数、浮動小数点
レジスタ	● レガシーモード：汎用 32bit: 8 個、128bit-XMM:8 個、64bit MMX:8個(x87互換用:8個と同一) ● 64bit モード：汎用 64bit:16 個、128bit-XMM:16 個、64bit MMX:8個(x87互換用:8個と同一)
システムバス	1000 MHz

物理ノードの構成(タイプA群)

ソケット、ノードとは



ノード構成(東大、タイプA群)

ccNUMA構成とは

各CPUの内部構成

L3			
L2	L2	L2	L2
L1	L1	L1	L1
Core #0	Core #1	Core #2	Core #3

アクセス
速い

Memory #0

Memory #1

AMD Quad
Core Opteron
#0

AMD
Quad Core
Opteron
#1

South
Bridge

Myrinet

Myrinet

共有メモリ
でアクセス
時間が
不均一
(ccNUMA)

アクセス
遅い

AMD Quad
Core Opteron
#2

AMD Quad
Core Opteron
#3

South
Bridge

Myrinet

Myrinet

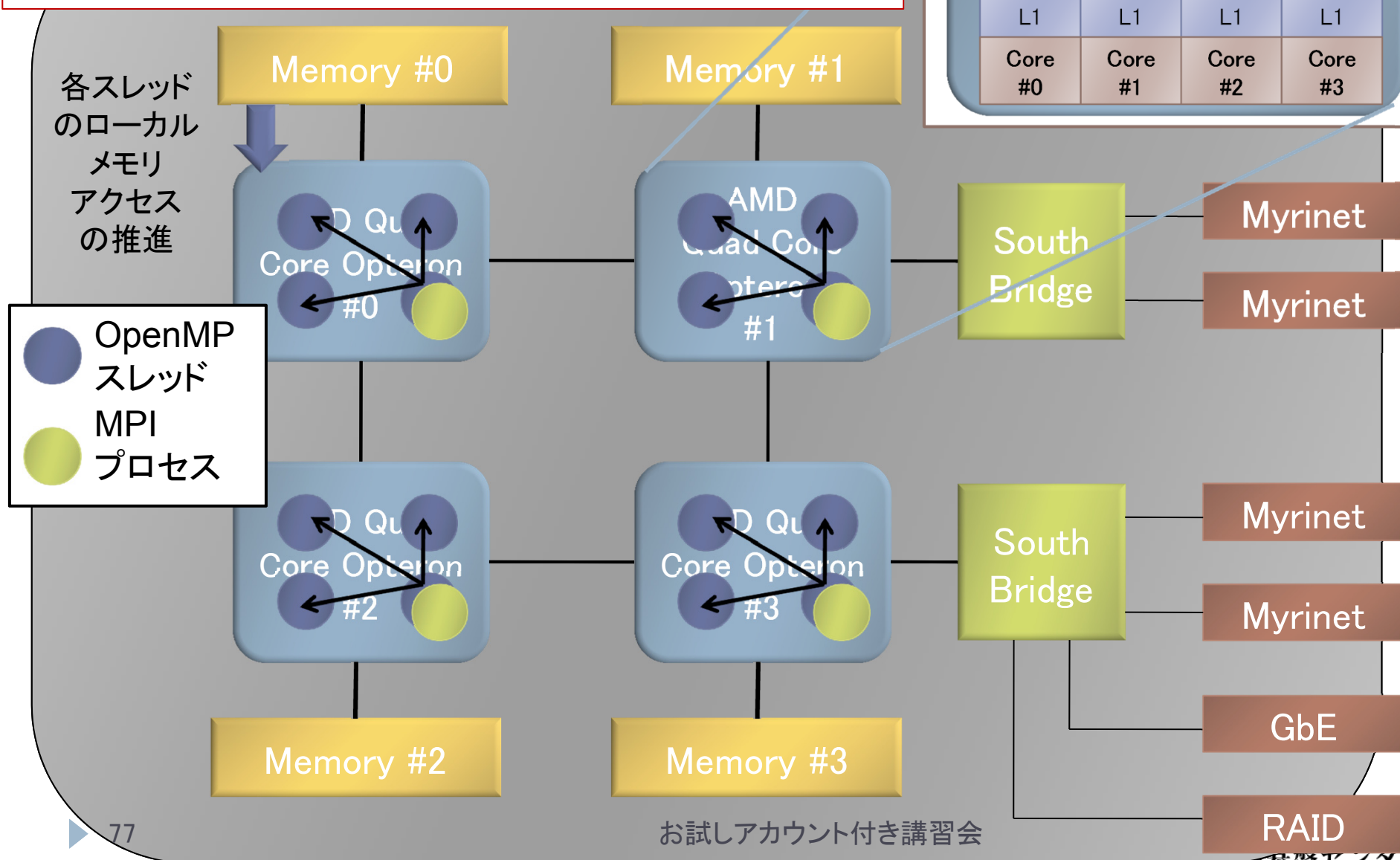
GbE

RAID

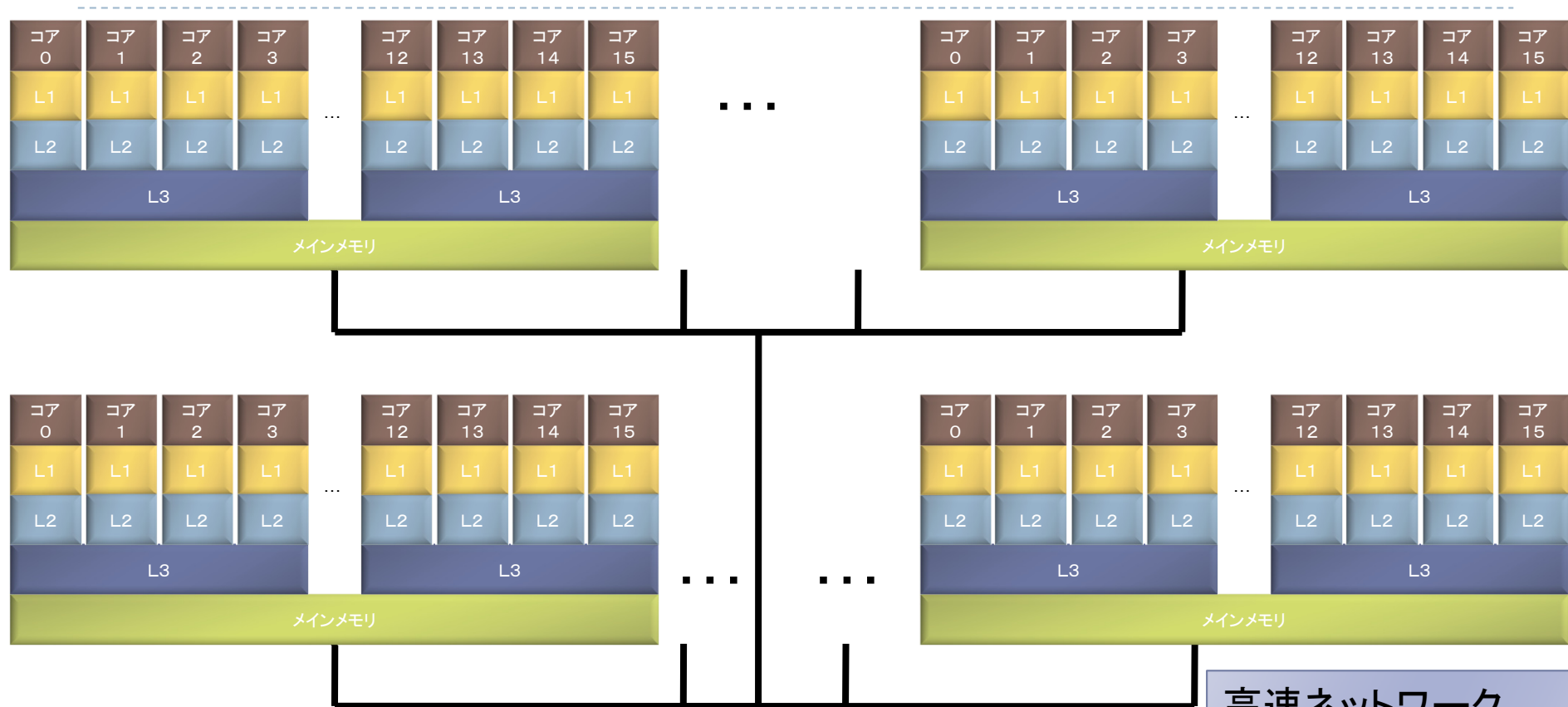
Memory #2

Memory #3

ピュアMPI: MPIプロセス数 = コア数
 ハイブリッドMPI: (1つの例)
 MPIプロセス数: 4、OpenMPスレッド数: 4



スパコンでの全体メモリ構成図



メモリが多段に階層化
(L1、L2、L3、分散メモリ)

高速ネットワーク
(5Gバイト／秒
× 双方向)
(タイプA群)

T2K オープンスパコンの詳細情報

- ▶ 以下のページをご参照ください

- ▶ 利用申請方法

- ▶ 運営体系

- ▶ 料金体系

- ▶ 利用の手引

などがご覧になれます。

<http://www.cc.u-tokyo.ac.jp/service/ha8000/>

東大情報基盤センタHA8000クラスタシステムの料金表 (2011年4月1日)

▶ パーソナルコース(年間)

- ▶ コース1: 95,000円 : 4ノード
- ▶ コース2: 130,000円 : 8ノード
- ▶ コース3: 190,000円 : 16ノード
- ▶ コース4: 260,000円 : 32ノード
- ▶ コース5: 380,000円 : 64ノード
- ▶ 月に1度、ひとつ上のコースで実行可能。コース5は、256ノード。

▶ 専用キュー

- ▶ 850,000円 : 8ノード

▶ ノード固定

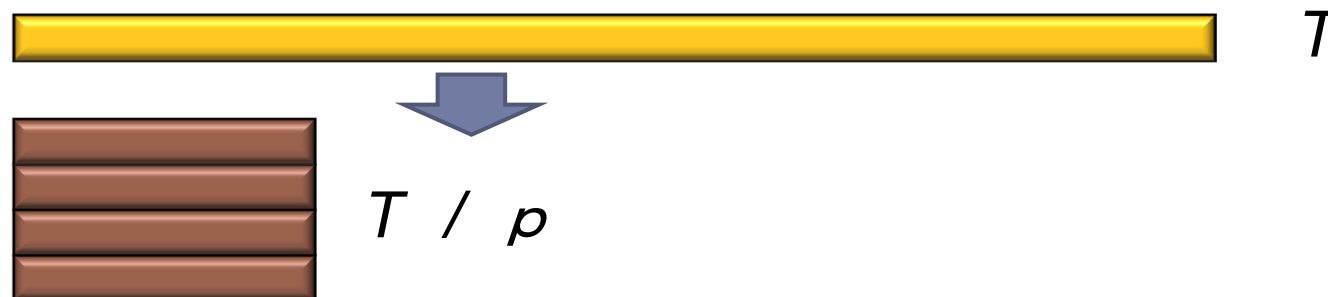
- ▶ 1,250,000円 : 8ノード

▶ 以上は、「大学等」料金

並列プログラミングの基礎

並列プログラミングとは何か？

- ▶ 逐次実行のプログラム(実行時間 T)を、 p 台の計算機を使って、 T/p にすること.

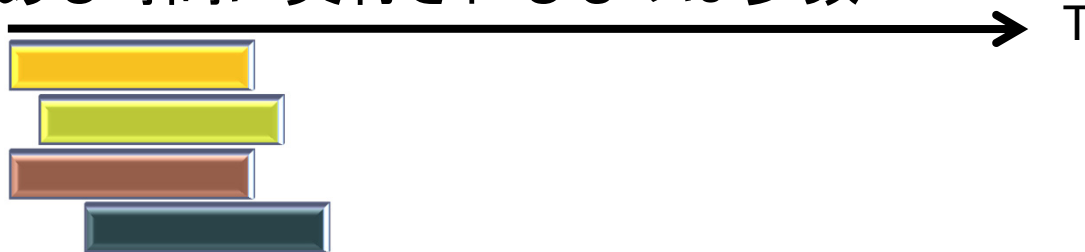


- ▶ 素人考えでは自明。
- ▶ 実際は、できるかどうかは、対象処理の内容(アルゴリズム)で **大きく** 難しさが違う
 - ▶ アルゴリズム上、絶対に並列化できない部分の存在
 - ▶ 通信のためのオーバーヘッドの存在
 - ▶ 通信立ち上がり時間
 - ▶ データ転送時間

並列と並行

▶ 並列 (Parallel)

- ▶ 物理的に並列 (時間的に独立)
- ▶ ある時間に実行されるものは多数



▶ 並行 (Concurrent)

- ▶ 論理的に並列 (時間的に依存)
- ▶ ある時間に実行されるものは1つ (= 1プロセッサで実行)



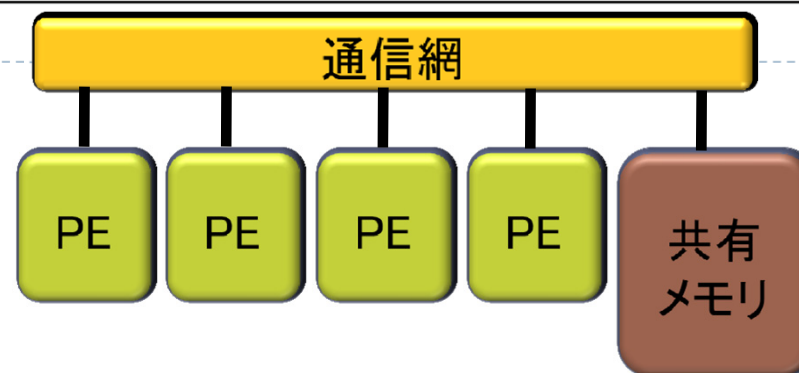
- ▶ 時分割多重、疑似並列
- ▶ OSによるプロセス実行スケジューリング (ラウンドロビン方式)

並列計算機の種類

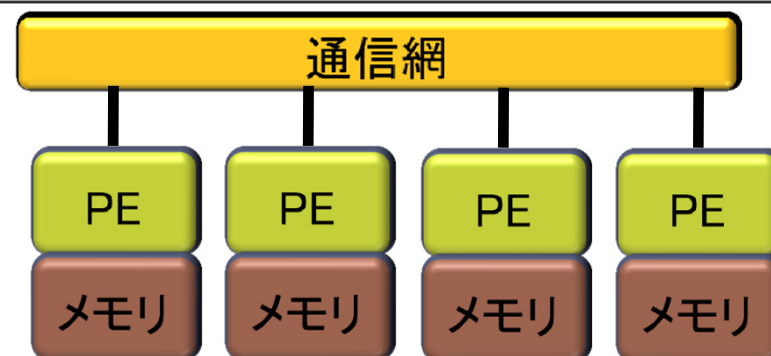
- ▶ Michael J. Flynn教授(スタンフォード大)の種類(1966)
- ▶ 単一命令・単一データ流
(SISD, Single Instruction Single Data Stream)
- ▶ 単一命令・複数データ流
(SIMD, Single Instruction Multiple Data Stream)
- ▶ 複数命令・単一データ流
(MISD, Multiple Instruction Single Data Stream)
- ▶ 複数命令・複数データ流
(MIMD, Multiple Instruction Multiple Data Stream)

並列計算機のメモリ型による分類

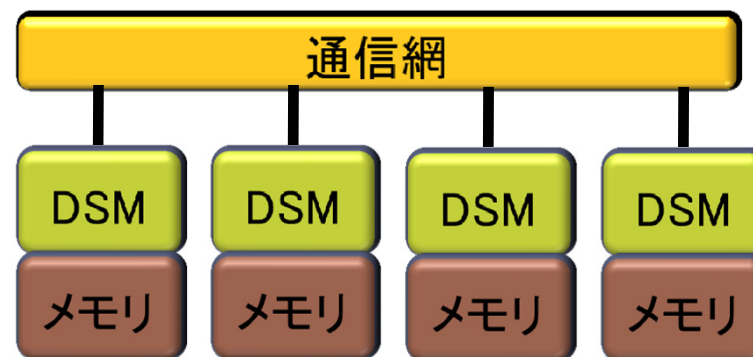
1. 共有メモリ型
(SMP、
Symmetric Multiprocessor)



2. 分散メモリ型
(メッセージパッシング)

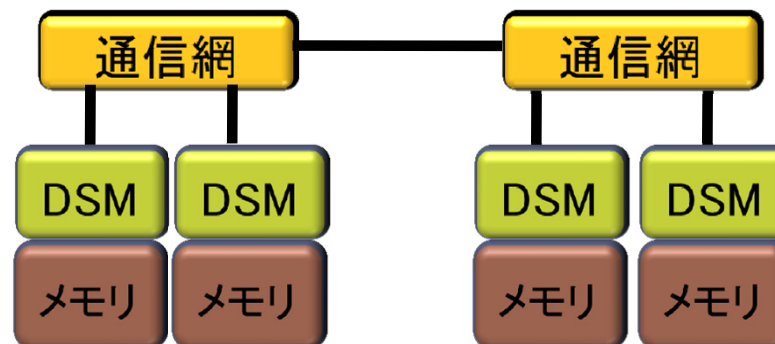


3. 分散共有メモリ型
(DSM、
Distributed Shared Memory)



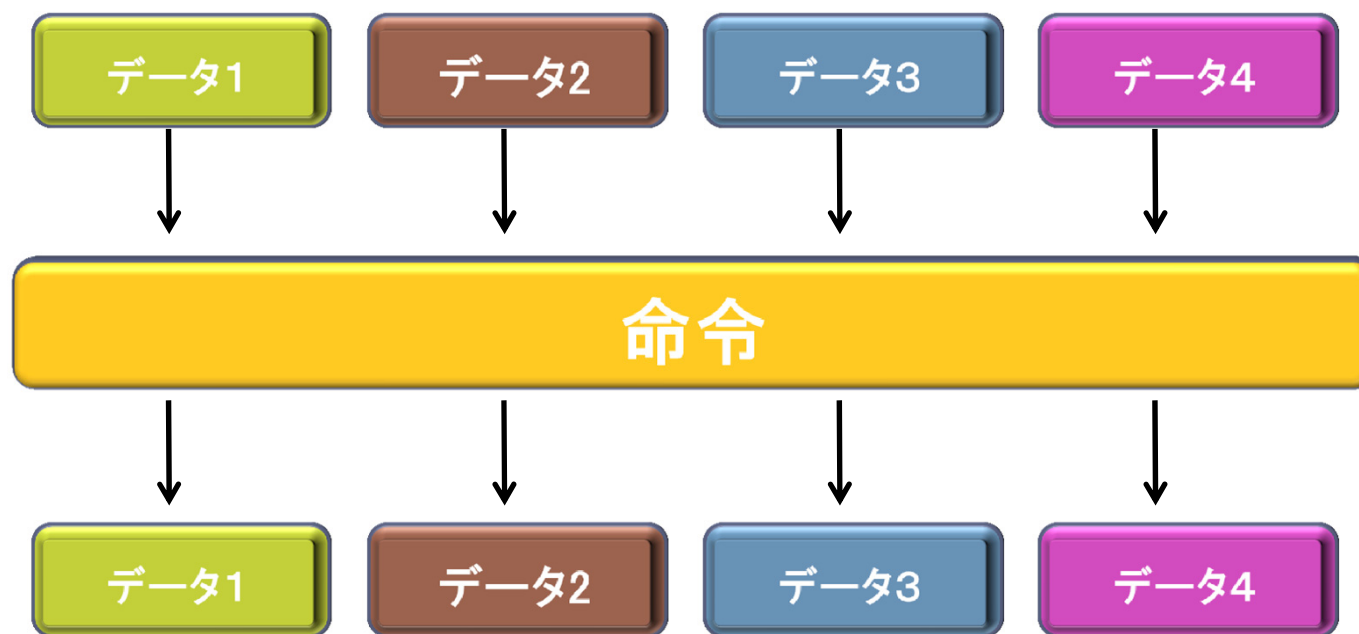
並列計算機のメモリ型による分類

4. 共有・非対称メモリ型
(ccNUMA、
Cache Coherent Non-
Uniform Memory Access)



並列プログラミングのモデル

- ▶ 実際の並列プログラムの挙動はMIMD
- ▶ アルゴリズムを考えるときは＜SIMDが基本＞
 - ▶ 複雑な挙動は理解できないので



並列プログラミングのモデル

▶ MIMD上での並列プログラミングのモデル

1. SPMD (Single Program Multiple Data)

- ▶ 1つの共通のプログラムが、並列処理開始時に、全プロセッサ上で起動する
- ▶ MPI(バージョン1)のモデル



2. Master / Worker (Master / Slave)

- ▶ 1つのプロセス (Master) が、複数のプロセス (Worker) を管理 (生成、消去) する。

並列プログラムの種類

▶ マルチプロセス

- ▶ MPI (Message Passing Interface)
- ▶ HPF (High Performance Fortran)
 - ▶ 自動並列化Fortranコンパイラ
 - ▶ ユーザがデータ分割方法を明示的に記述

プロセスとスレッドの違い

- メモリを意識するかどうかの違い
- 別メモリは「プロセス」
- 同一メモリは「スレッド」

▶ マルチスレッド

- ▶ Pthread (POSIX スレッド)
- ▶ Solaris Thread (Sun Solaris OS用)
- ▶ NT thread (Windows NT系、Windows95以降)
 - ▶ スレッドの Fork(分離) と Join(融合) を明示的に記述
- ▶ Java
 - ▶ 言語仕様としてスレッドを規定
- ▶ Open MP
 - ▶ ユーザが並列化指示行を記述

並列処理の実行形態（１）

▶ データ並列

- ▶ データを分割することで並列化する。
- ▶ データの操作（＝演算）は同一となる。
- ▶ データ並列の例：行列－行列積

$$\begin{pmatrix} 1 & 2 & 3 \\ 4 & 5 & 6 \\ 7 & 8 & 9 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 9 & 8 & 7 \\ 6 & 5 & 4 \\ 3 & 2 & 1 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 1*9+2*6+3*3 & 1*8+2*5+3*2 & 1*7+2*4+3*1 \\ 4*9+5*6+6*3 & 4*8+5*5+6*2 & 4*7+5*4+6*1 \\ 7*9+8*6+9*3 & 7*8+8*5+9*2 & 7*7+8*4+9*1 \end{pmatrix}$$

● 並列化

全CPUで共有

CPU0	1 2 3	9 8 7 6 5 4 3 2 1	=	1*9+2*6+3*3 1*8+2*5+3*2 1*7+2*4+3*1
CPU1	4 5 6			4*9+5*6+6*3 4*8+5*5+6*2 4*7+5*4+6*1
CPU2	7 8 9			7*9+8*6+9*3 7*8+8*5+9*2 7*7+8*4+9*1

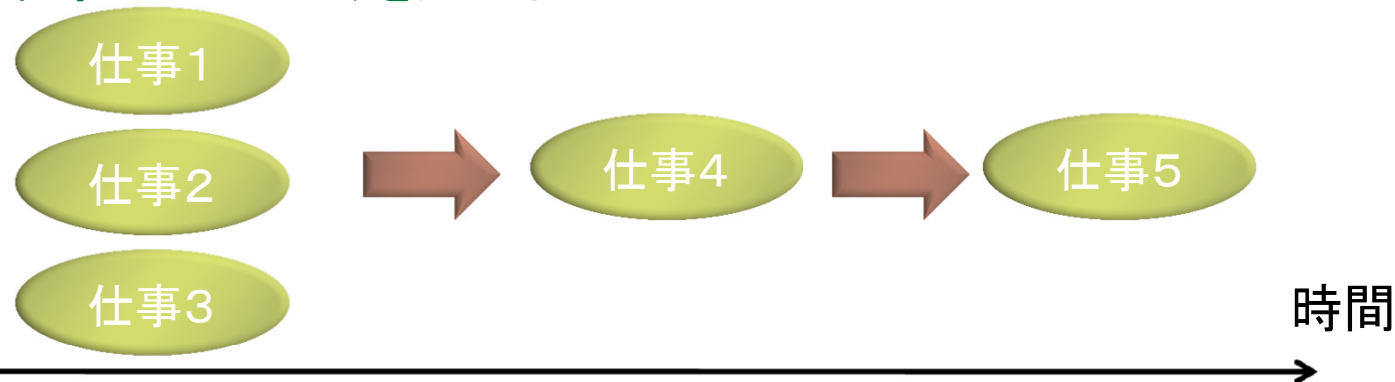
並列に計算：初期データは異なるが演算は同一

並列処理の実行形態（２）

▶ タスク並列

- ▶ タスク(ジョブ)を分割することで並列化する。
- ▶ データの操作(=演算)は異なるかもしれない。
- ▶ タスク並列の例: **カレーを作る**
 - ▶ 仕事1: 野菜を切る
 - ▶ 仕事2: 肉を切る
 - ▶ 仕事3: 水を沸騰させる
 - ▶ 仕事4: 野菜・肉を入れて煮込む
 - ▶ 仕事5: カレールーを入れる

● 並列化



MPIの特徴

- ▶ **メッセージパッシング用のライブラリ規格の1つ**
 - ▶ メッセージパッシングのモデルである
 - ▶ コンパイラの規格、特定のソフトウェアやライブラリを指すものではない！
- ▶ 分散メモリ型並列計算機で並列実行に向く
- ▶ 大規模計算が可能
 - ▶ 1プロセッサにおけるメモリサイズやファイルサイズの制約を打破可能
 - ▶ プロセッサ台数の多い並列システム(MPPシステム、Massively Parallel Processingシステム)を用いる実行に向く
 - ▶ 1プロセッサ換算で膨大な実行時間の計算を、短時間で処理可能
 - ▶ 移植が容易
 - ▶ **API(Application Programming Interface)の標準化**
- ▶ スケーラビリティ、性能が高い
 - ▶ 通信処理をユーザが記述することによるアルゴリズムの最適化が可能
 - ▶ プログラミングが難しい(敷居が高い)

MPIの経緯 (1/2)

- ▶ MPIフォーラム(<http://www.mpi-forum.org/>)が仕様策定
 - ▶ 1994年5月1.0版(MPI-1)
 - ▶ 1995年6月1.1版
 - ▶ 1997年7月1.2版、および 2.0版(MPI-2)
- ▶ 米国アルゴンヌ国立研究所、およびミシシッピ州立大学で開発
- ▶ MPI-2 では、以下を強化:
 - ▶ 並列I/O
 - ▶ C++、Fortran 90用インターフェース
 - ▶ 動的プロセス生成/消滅
 - ▶ 主に、並列探索処理などの用途
 - ▶ 片方向通信、RMA (Remote Memory Access)

MPIの経緯 (2/2) MPI3.0策定

- ▶ 以下のページで経緯が公開中
 - ▶ http://meetings.mpi-forum.org/MPI_3.0_main_page.php
- ▶ 注目すべき機能(検討中)
 - ▶ RMA (Remote Memory Access) サポート
 - ▶ FT (Fault Tolerant) stabilization、FT を意識したMPIプログラム作成のAPI群とセマンティクス
 - ▶ MPIT (Performance Tool)、デバッガやパフォーマンスモニタ、開発環境といったツール群とのインターフェース仕様
 - ▶ Neighborhood collectives(物理的に近いノードを対象にした専用コレクティブ通信), 粗通信モデルの為の集団通信API
 - ▶ Fortran bindings – improved Fortran bindings, taking into account Fortran 2003 and 2008 features.
 - ▶ Non-blocking collective I/O – extend non-blocking collective support to include MPI-I/O
 - ▶ Hybrid: Shared memory communicator, Threads, and Endpoint proposals

MPIの実装

- ▶ **MPICH(エム・ピッチ)**
 - ▶ 米国アルゴンヌ国立研究所が開発
- ▶ LAM(Local Area Multicomputer)
 - ▶ ノートルダム大学が開発
- ▶ その他
 - ▶ OpenMPI (FT-MPI, LA-MPI, LAM/MPI, PACX-MPIの統合プロジェクト)
 - ▶ YAMPII(東大・石川研究室)(SCore通信機構をサポート)
- ▶ 注意点:メーカー独自機能拡張がなされていることがある

MPIによる通信

- ▶ 郵便物の郵送に同じ
- ▶ 郵送に必要な情報:
 1. 自分の住所、送り先の住所
 2. 中に入っているものはどこにあるか
 3. 中に入っているものの分類
 4. 中に入っているものの量
 5. (荷物を複数同時に送る場合の)認識方法(タグ)
- ▶ MPIでは:
 1. 自分の認識ID、および、送り先の認識ID
 2. データ格納先のアドレス
 3. データ型
 4. データ量
 5. タグ番号

MPI関数

▶ システム関数

- ▶ MPI_Init; MPI_Comm_rank; MPI_Comm_size; MPI_Finalize;

▶ 1対1通信関数

▶ ブロッキング型

- ▶ MPI_Send; MPI_Recv;

▶ ノンブロッキング型

- ▶ MPI_Isend; MPI_Irecv;

▶ 1対全通信関数

- ▶ MPI_Bcast

▶ 集団通信関数

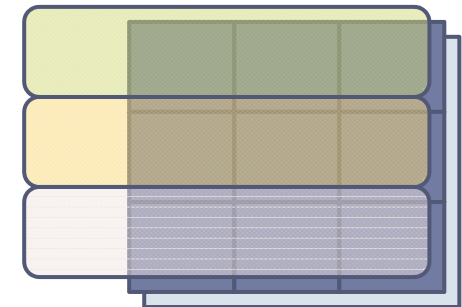
- ▶ MPI_Reduce; MPI_Allreduce; MPI_Barrier;

▶ 時間計測関数

- ▶ MPI_Wtime

コミュニケータ

- ▶ MPI_COMM_WORLDは、コミュニケータと呼ばれる概念を保存する変数
- ▶ コミュニケータは、操作を行う対象のプロセッサ群を定める
- ▶ 初期状態では、0番～ $\text{numprocs} - 1$ 番までのプロセッサが、1つのコミュニケータに割り当てられる
 - ▶ この名前が、“MPI_COMM_WORLD”
- ▶ プロセッサ群を分割したい場合、MPI_Comm_split 関数を利用
 - ▶ メッセージを、一部のプロセッサ群に放送するときに利用
 - ▶ “マルチキャスト”で利用



性能評価指標

並列化の尺度

性能評価指標－台数効果

▶ 台数効果

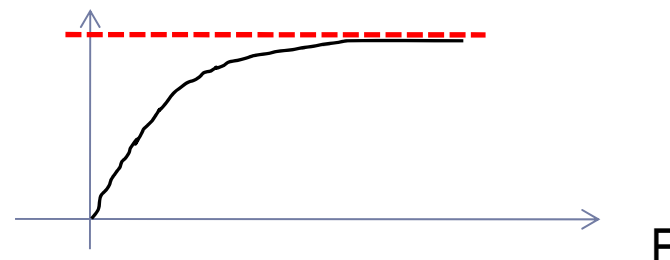
- ▶ 式: $S_p = T_s / T_p$ ($0 \leq S_p$)
- ▶ T_s : 逐次の実行時間、 T_p : P台での実行時間
- ▶ P台用いて $S_p = P$ のとき、理想的な(ideal)速度向上
- ▶ P台用いて $S_p > P$ のとき、スーパリニア・スピードアップ
 - ▶ 主な原因は、並列化により、データアクセスが局所化されて、キャッシュヒット率が向上することによる高速化

▶ 並列化効率

- ▶ 式: $E_p = S_p / P \times 100$ ($0 \leq E_p$) [%]

▶ 飽和性能

- ▶ 速度向上の限界
- ▶ Saturation、「さちる」



アムダールの法則

- ▶ 逐次実行時間を K とする。
そのうち、並列化ができる割合を α とする。
- ▶ このとき、台数効果は以下のようになる。

$$\begin{aligned} S_p &= K / (K\alpha / P + K(1-\alpha)) \\ &= 1 / (\alpha / P + (1-\alpha)) = 1 / (\alpha(1/P - 1) + 1) \end{aligned}$$

- ▶ 上記の式から、たとえ無限大の数のプロセッサを使っても ($P \rightarrow \infty$)、台数効果は、高々 $1 / (1 - \alpha)$ である。

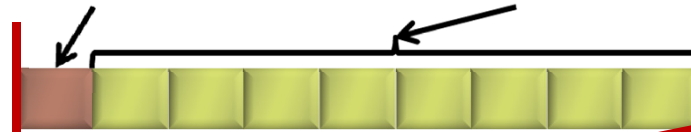
(アムダールの法則)

- ▶ 全体の90%が並列化できたとしても、無限大の数のプロセッサをつかっても、 $1 / (1 - 0.9) = 10$ 倍 にしかない！
→ 高性能を達成するためには、少しでも並列化効率を上げる実装をすることがとても重要である

アムダールの法則の直観例

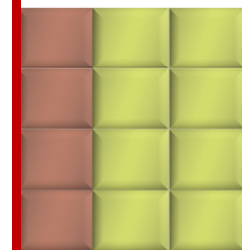
並列化できない部分(1ブロック) 並列化できる部分(8ブロック)

● 逐次実行



=88.8%が並列化可能

● 並列実行(4並列)



$9/3=3$ 倍

● 並列実行(8並列)



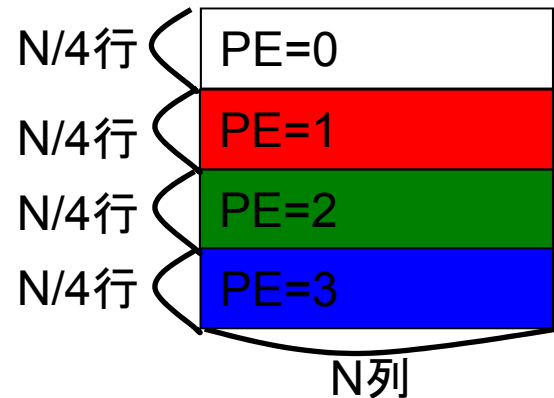
$9/2=4.5$ 倍 $\neq$ 6倍

1. 基本演算

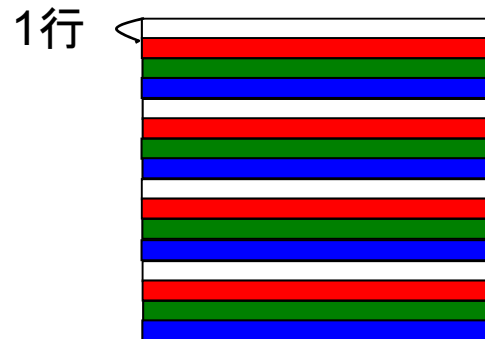
- ▶ 逐次処理では、「データ構造」が重要
- ▶ 並列処理においては、「データ分散方法」が重要になる！
 1. 各PEの「演算負荷」を均等にする
 - ▶ ロード・バランシング： 並列処理の基本操作の一つ
 - ▶ 粒度調整
 2. 各PEの「利用メモリ量」を均等にする
 3. 演算に伴う通信時間を短縮する
 4. 各PEの「データ・アクセスパターン」を高速な方式にする
(= 逐次処理におけるデータ構造と同じ)
- ▶ 行列データの分散方法
 - ▶ <次元レベル>： 1次元分散方式、2次元分散方式
 - ▶ <分割レベル>： ブロック分割方式、サイクリック(循環)分割方式

1.1.1

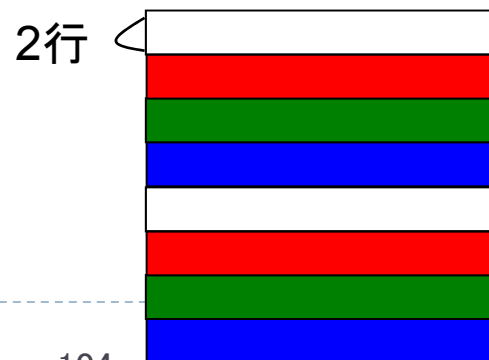
1次元分散



- (行方向) ブロック分割方式
- (Block, *) 分散方式



- (行方向) サイクリック分割方式
- (Cyclic, *) 分散方式

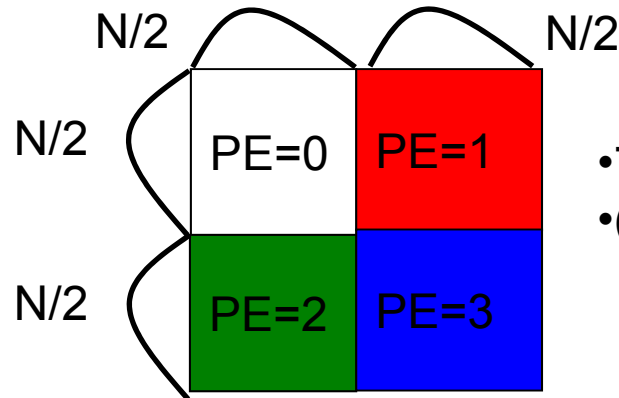


- (行方向)ブロック・サイクリック分割方式
- (Cyclic(2), *) 分散方式

この例の「2」: <ブロック幅>とよぶ

1.1.2

2次元分散



- ブロック・ブロック分割方式
- (Block, Block)分散方式

- サイクリック・サイクリック分割方式
- (Cyclic, Cyclic)分散方式

0	0	1	1	0	0	1	1
0	0	1	1	0	0	1	1
2	2	3	3	2	2	3	3
2	2	3	3	2	2	3	3
0	0	1	1	0	0	1	1
0	0	1	1	0	0	1	1
2	2	3	3	2	2	3	3
2	2	3	3	2	2	3	3

- 二次元ブロック・サイクリック分割方式
- (Cyclic(2), Cyclic(2))分散方式

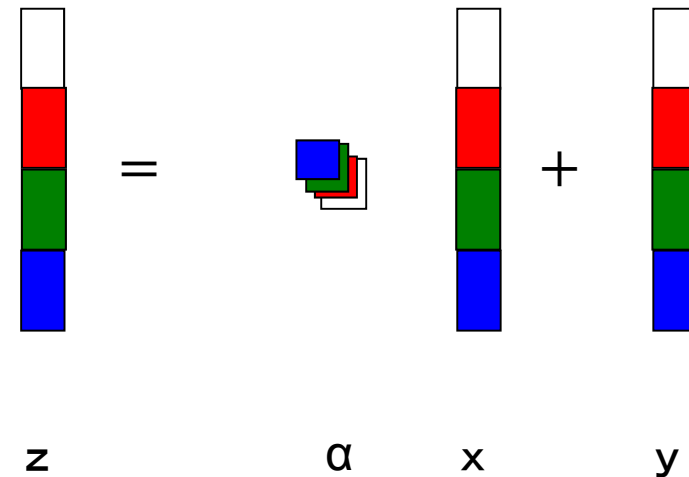
0	1	0	1	0	1	0	1
2	3	2	3	2	3	2	3
0	1	0	1	0	1	0	1
2	3	2	3	2	3	2	3
0	1	0	1	0	1	0	1
2	3	2	3	2	3	2	3
0	1	0	1	0	1	0	1
2	3	2	3	2	3	2	3

1.2 ベクトルどうしの演算

- ▶ 以下の演算

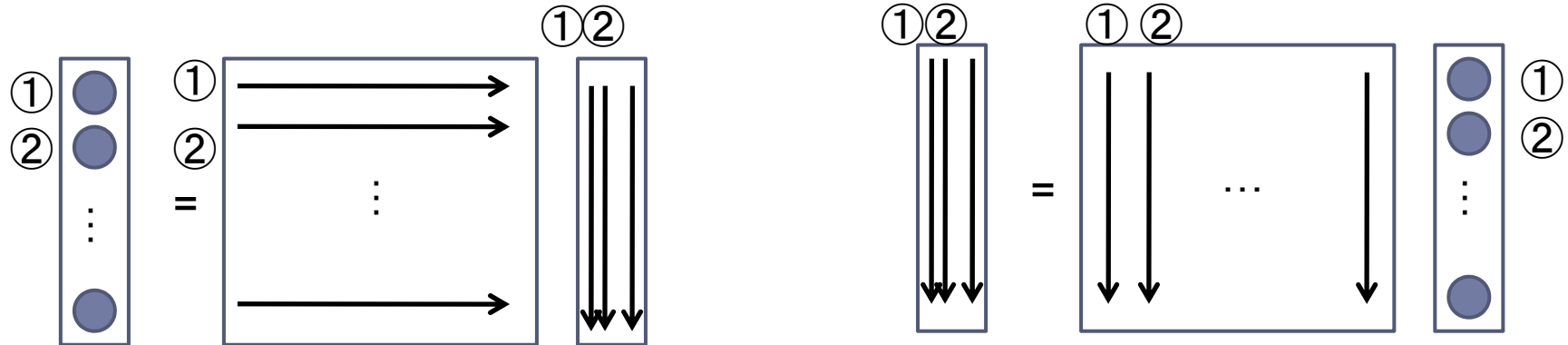
$$z = \alpha x + y$$

- ▶ ここで、 α はスカラ、 z 、 x 、 y はベクトル
- ▶ どのようなデータ分散方式でも並列処理が可能
 - ▶ ただし、スカラ α は全PEで所有する。
 - ▶ ベクトルは $O(n)$ のメモリ領域が必要なのに対し、スカラは $O(1)$ のメモリ領域で大丈夫。
→スカラメモリ領域は無視可能
- ▶ 計算量： $O(N/P)$
- ▶ あまり面白くない



1.3 行列とベクトルの積

- ▶ **<行方式>**と**<列方式>**がある。
- ▶ **<データ分散方式>**と**<方式>**組のみ合わせがあり、少し面白い



```
for (i=0; i<n; i++) {  
    y[i]=0.0;  
    for (j=0; j<n; j++) {  
        y[i] += a[i][j]*x[j];  
    }  
}
```

<行方式>： 自然な実装
C言語向き

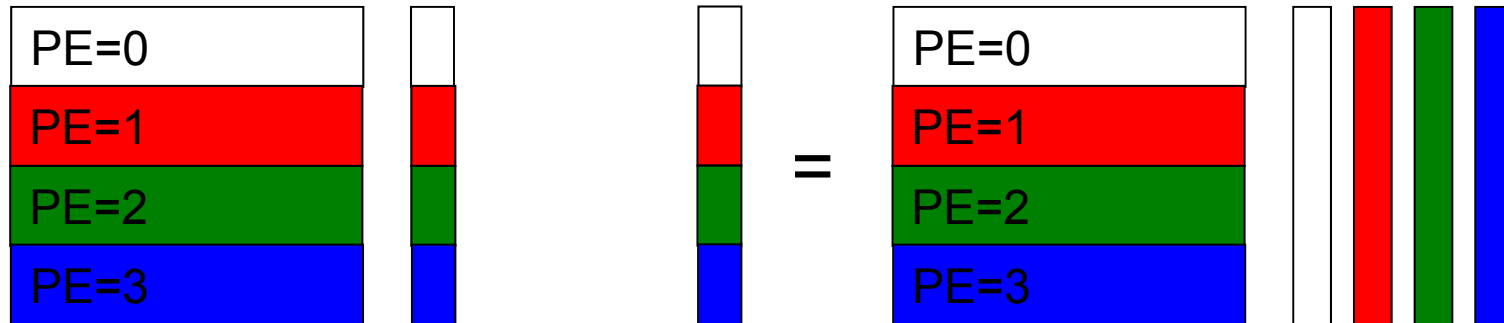
```
for (j=0; j<n; j++) y[j]=0.0;  
for (j=0; j<n; j++) {  
    for (i=0; i<n; i++) {  
        y[i] += a[i][j]*x[j];  
    }  
}
```

<列方式>： Fortran言語向き

行列とベクトルの積

＜行方式の場合＞

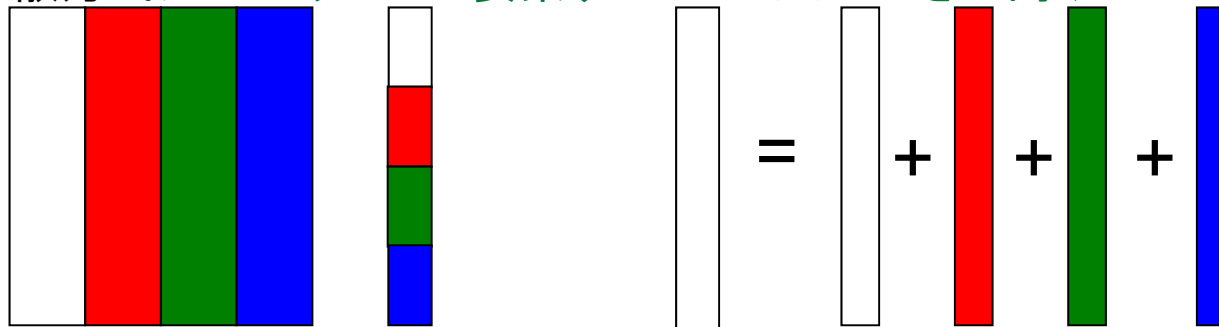
＜行方向分散方式＞ : 行方式に向く分散方式



右辺ベクトルを `MPI_Allgather` 関数
を利用し、全PEで所有する

各PE内で行列ベクトル積を行う

＜列方向分散方式＞ : ベクトルの要素すべてがほしいときに向く



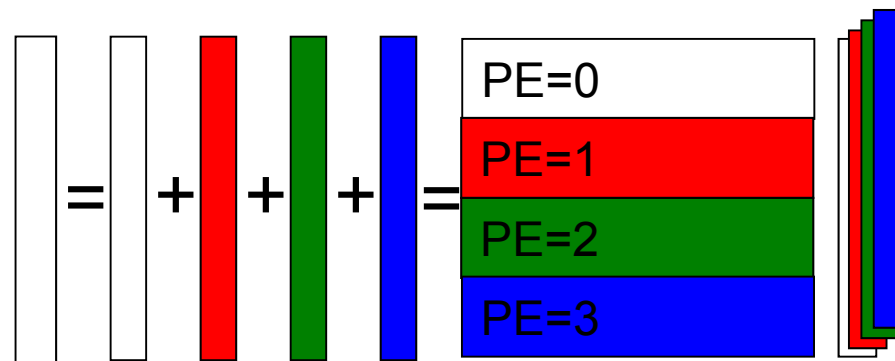
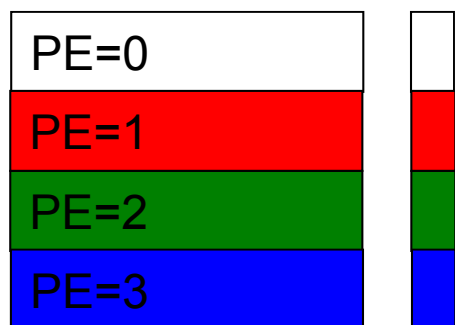
各PE内で行列-ベクトル積
を行う

`MPI_Reduce` 関数で総和を求める
(※ある1PEにベクトルすべてが集まる)

行列とベクトルの積

＜列方式の場合＞

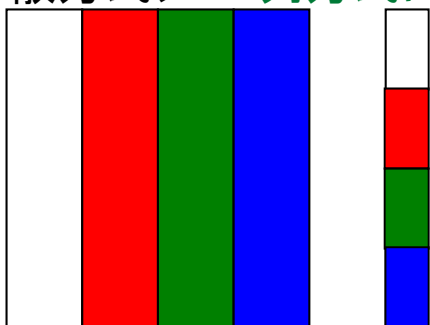
＜行方向分散方式＞ : 無駄が多く使われない



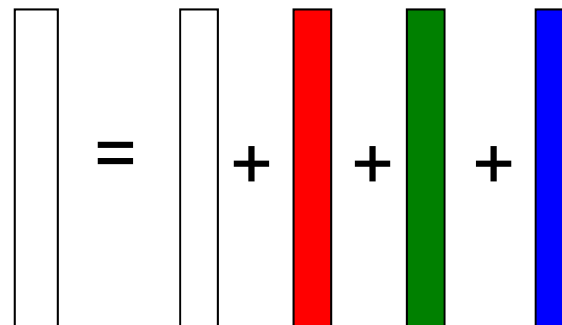
右辺ベクトルを `MPI_Allgather` 関数
を利用して、全PEで所有する

結果を `MPI_Reduce` 関数により
総和を求める

＜列方向分散方式＞ : 列方式に向く分散方式



各PE内で行列-ベクトル積
を行う



`MPI_Reduce` 関数で総和を求める
(※ある1PEにベクトルすべてが集まる)

参考文献

1. MPI並列プログラミング、P.パチェコ 著 / 秋葉 博 訳
2. 並列プログラミング虎の巻MPI版、青山幸也 著、
理化学研究所情報基盤センタ
(<http://accc.riken.jp/HPC/training/text.html>)
3. Message Passing Interface Forum
(<http://www.mpi-forum.org/>)
4. MPI-Jメーリングリスト
(<http://phase.hpcc.jp/phase/mpi-j/ml/>)
5. 並列コンピュータ工学、富田眞治著、昭晃堂(1996)

プログラム実習 I (BLAS) (演習)

東京大学情報基盤センター 准教授 片桐孝洋

2011年12月21日(水) 15:15-17:00

お試しアカウント付き講習会

演習内容

- ▶ BLASとは
- ▶ GOTO BLASとは
- ▶ LAPACKとは
- ▶ ScaLAPACKとは
- ▶ BLASの利用法と実習 (DGEMM)

1.8 BLASとPBLAS

- ▶ BLAS (Basic Linear Algebra Subprograms、基本線形代数副プログラム集)
 - ▶ 線形代数計算で用いられる、基本演算を標準化(API化)したもの。
 - ▶ 普通は、密行列用の線形代数計算用の基本演算の副プログラムを指す。
 - ▶ 疎行列の基本演算用の<スパースBLAS>というものがあるが、まだ定着していない。

1.8 BLASとPBLAS

- ▶ 高性能なライブラリの＜作成の手間＞と、＜プログラム再利用性＞を高める目的で提案
- ▶ BLAS演算の性能改善を、個々のユーザが、個々のプログラムで独立して行うのは、
ソフトウェア開発効率が悪い
 - ▶ ＜工学的＞でない
- ▶ 性能を改善するチューニングは、経験のないユーザには無理
 - ▶ ＜職人芸＞ ≠ ＜科学、工学＞
- ▶ BLASは、数学ソフトウェアにおける
＜ソフトウェア工学＞のはしり

1.8 BLASとPBLAS

- ▶ BLASでは、以下のように分類わけをして、サブルーチンの命名規則を統一
 1. 演算対象のベクトルや行列の型(整数型、実数型、複素型)
 2. 行列形状(対称行列、三重対角行列)
 3. データ格納形式(帯行列を二次元に圧縮)
 4. 演算結果が何か(行列、ベクトル)
- ▶ 演算性能から、以下の3つに演算を分類
 - ▶ レベル1 BLAS: ベクトルとベクトルの演算
 - ▶ レベル2 BLAS: 行列とベクトルの演算
 - ▶ レベル3 BLAS: 行列と行列の演算

1.8 BLASとPBLAS

▶ レベル1 BLAS

▶ ベクトル内積、ベクトル定数倍の加算、など

▶ 例: $y \leftarrow \alpha x + y$

▶ データの読み出し回数、演算回数がほぼ同じ

▶ データの再利用(キャッシュに乗ったデータの再利用によるデータアクセス時間の短縮)がほとんどできない

▶ 実装による性能向上が、あまり期待できない

▶ ほとんど、計算機ハードウェアの演算性能

▶ レベル1BLASのみで演算を実装すると、演算が本来持っているデータ再利用性がなくなる

▶ 例: 行列-ベクトル積を、レベル1BLASで実装

1.8 BLASとPBLAS

▶ レベル2 BLAS

▶ 行列-ベクトル積などの演算

▶ 例: $y \leftarrow \alpha A x + \beta y$

▶ 前進/後退代入演算、 $Tx = y$ (T は三角行列)を x について解く演算、を含む

▶ レベル1BLASのみの実装による、データ再利用性の喪失を回避する目的で提案

▶ 行列とベクトルデータに対して、データの再利用性あり

▶ データアクセス時間を、実装法により短縮可能

▶ (実装法により)性能向上がレベル1BLASに比べしやすい(が十分でない)

1.8 BLASとPBLAS

▶ レベル3 BLAS

▶ 行列-行列積などの演算

▶ 例: $C \leftarrow \alpha A B + \beta C$

▶ 共有記憶型の並列ベクトル計算機では、レベル2 BLASでも性能向上が達成できない。

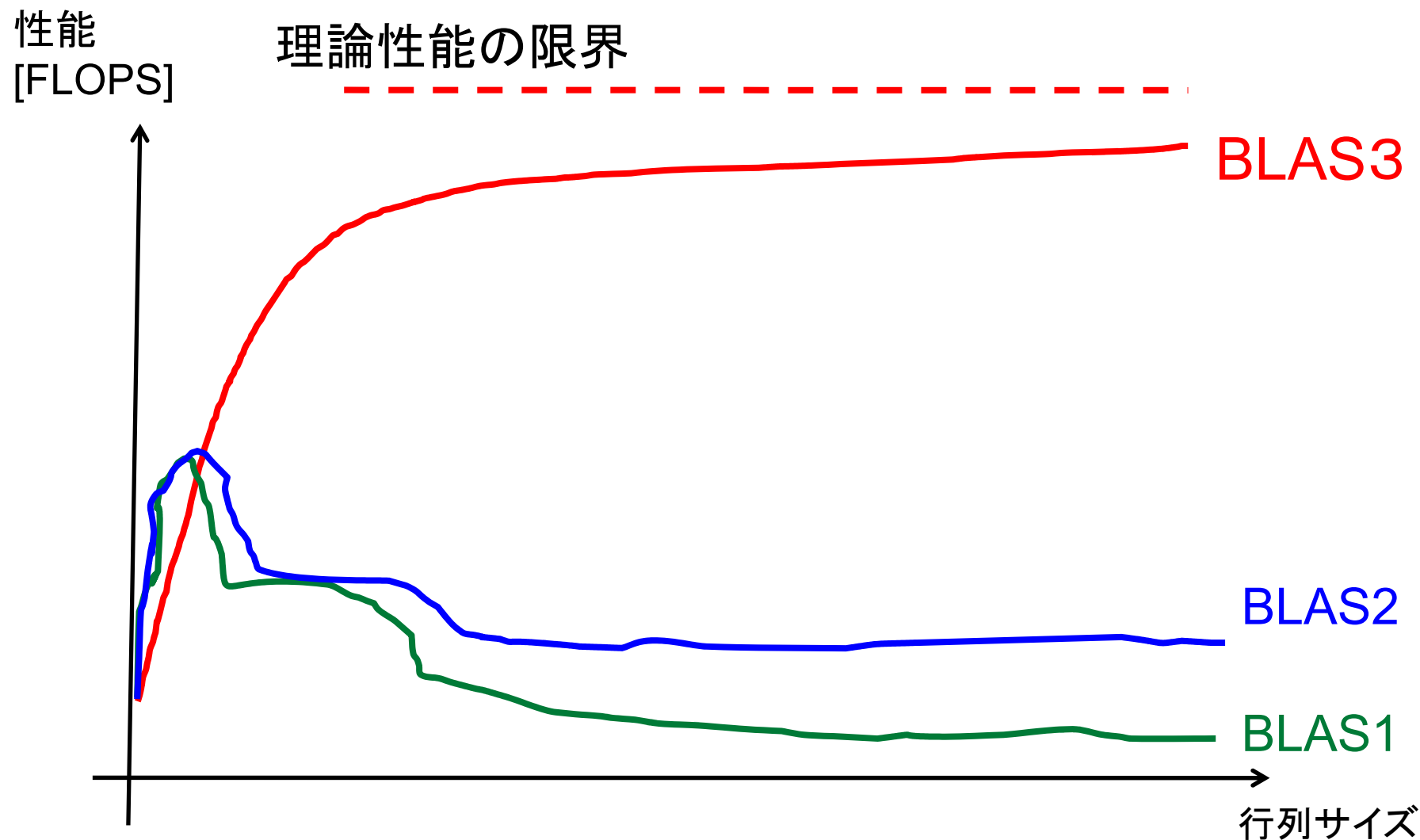
▶ 並列化により1PE当たりのデータ量が減少する。

▶ より大規模な演算をとり扱わないと、再利用の効果がない。

▶ 行列-行列積では、行列データ $O(n^2)$ に対して演算は $O(n^3)$ なので、データ再利用性が原理的に高い。

▶ 行列積は、アルゴリズムレベルでもブロック化できる。
さらにデータの局所性を高めることができる。

典型的なBLASの性能



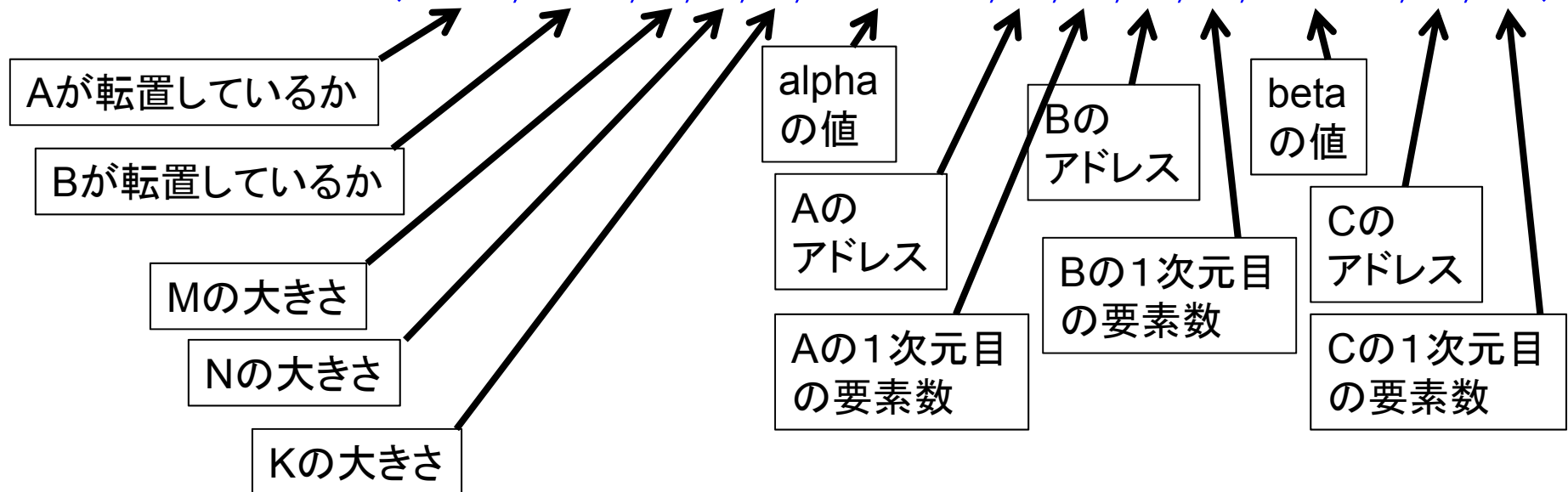
BLAS利用例

▶ 倍精度演算BLAS3

$C := \alpha * op(A) * op(B) + \beta * C$

A: M*K; B:K*N; C:M*N;

CALL DGEMM('N', 'N', n, n, n, ALPHA, A, N, B, N, BETA, C, N)



引数が多すぎ！ とても使いにくい！

1.8 BLASとPBLAS

▶ PBLAS

- ▶ 並列版のBLAS
- ▶ BLASとほぼ同じインタフェースをもつ
- ▶ BLAS利用者が、容易に移行できる
- ▶ ライブラリ再利用の目的で開発
 - ▶ 連立一次方程式用ライブラリ: *LINPACK* (リン・パック)
 - ▶ 固有値計算用ライブラリ: *EISPACK* (アイス・パック)
 - ▶ これらを統合したライブラリ: *LAPACK* (エル・エー・パック)
 - アルゴリズムレベルでブロック化して、レベル3 BLASを利用するアルゴリズムを新規開発
 - ▶ LAPACKを分散メモリ並列化: *ScaLAPACK* (スカラ・パック)
 - 並列版BLASとして、PBLASを利用

BLASの機能詳細

- ▶ 詳細はHP: <http://www.netlib.org/blas/>
- ▶ 命名規則: 関数名: **X****YYYY**
 - ▶ **X**: データ型
S:単精度、D:倍精度、C:複素、Z:倍精度複素
 - ▶ **YYYY**: 計算の種類
 - ▶ レベル1:
例: AXPY: ベクトルをスカラー倍して加算
 - ▶ レベル2:
例: GEMV: 一般行列とベクトルの積
 - ▶ レベル3:
例: GEMM: 一般行列どうしの積

インタフェース例：DGEMM (1 / 4)

▶ DGEMM

(TRANSA, TRANSB, M, N, K, ALPHA, A, LDA, B, LDB, BETA, C, LDC)

- ▶ $C := \alpha * \text{op}(A) * \text{op}(B) + \beta * C$ の計算をする
- ▶ $\text{op}(X) = X$ もしくは $\text{op}(X) = X'$ (Xの転置行列)

▶ 引数

▶ TRANSA(入力) - CHARACTER*1

- ▶ TRANSA は $\text{op}(A)$ の操作を指定する。以下の文字列を指定。
 - $\text{TRANSA} = 'N'$ もしくは 'n', $\text{op}(A) = A$
 - $\text{TRANSA} = 'T'$ もしくは 't', $\text{op}(A) = A'$
 - $\text{TRANSA} = 'C'$ or 'c', $\text{op}(A) = A'$

▶ TRANSB(入力) - CHARACTER*1

- ▶ TRANSB は $\text{op}(B)$ の操作を指定する。以下同様。

インタフェース例：DGEMM (2 / 4)

- ▶ **M(入力) – INTEGER**

- ▶ op(A) と 行列 Cの行の大きさを指定する。

- ▶ **N(入力) – INTEGER**

- ▶ op(B) と 行列 Cの列の大きさを指定する。

- ▶ **K(入力) – INTEGER**

- ▶ op(A) の列の大きさ、および op(B) の行の大きさを指定する。

- ▶ **ALPHA(入力) – DOUBLE PRECISION**

- ▶ スカラ値 ALPHAの値を設定する。

- ▶ **A(入力) – DOUBLE PRECISION**

- ▶ 行列Aの配列。大きさは (LDA, ka)で、ka はTRANSA = 'N' or 'n' のときはk。そうでないときは、m。

- ▶ TRANSA = 'N' or 'n' のときは、 $m \times k$ の配列の要素に行列Aを含まないといけない。そうでないときは、 $k \times m$ の配列に行列Aの転置を入れる。

インタフェース例：DGEMM (3 / 4)

▶ LDA(入力) – INTEGER

- ▶ 行列Aの最初の次元数を入れる。TRANSA = 'N' もしくは 'n' なら、LDA は $\max(1, m)$ でなくてはならない。そうでないなら、LDA は $\max(1, k)$ でなくてはならない。

▶ B(入力) – DOUBLE PRECISION

- ▶ 行列Bの配列。大きさは (LDB, kb) で、kb はTRANSA = 'N' or 'n' のときはn。そうでないときは、k。
- ▶ TRANSA = 'N' or 'n' のときは、 $k \times n$ の配列の要素に行列Bを含まないといけない。そうでないときは、 $n \times k$ の配列に行列Bの転置を入れる。

▶ LDB(入力) – INTEGER

- ▶ 行列Bの最初の次元数を入れる。TRANSA = 'N' もしくは 'n' なら、LDA は $\max(1, k)$ でなくてはならない。そうでないなら、LDB は $\max(1, n)$ でなくてはならない。

インタフェース例：DGEMM (4 / 4)

▶ BETA (入力) – DOUBLE PRECISION

- ▶ スカラ値 BETAの値を設定する。

▶ C (入力／出力) – DOUBLE PRECISION

- ▶ 行列Cの配列。
- ▶ 入力時、 $m \times n$ の配列に行列Cを入れる。配列には、BETAが0でない限り、行列Cを入れる。この場合は、Cの入力は必要ない。
- ▶ 出力時、この配列に、 $m \times n$ 行列の演算結果
($\alpha * \text{op}(A) * \text{op}(B) + \beta * C$)が上書きされて戻る。

▶ LDC (入力) – INTEGER

- ▶ 行列Cの最初の次元数を入れる。LDC は $\max(1, m)$ でなくてはならない。

BLASの問題点

▶ BLASの問題点

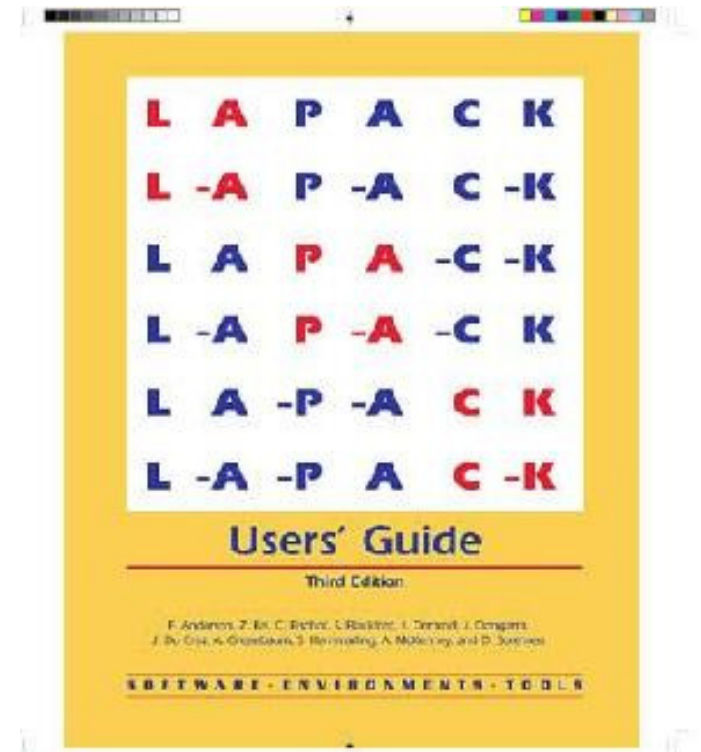
1. BLASやPBLASを用いると、データ再利用性や並列性が低下するかもしれない
 - ▶ 例: レベル1 BLASにおける行列-ベクトル積
2. インタフェースに合わせるため、無駄な処理(配列への代入等)が必要になる場合も
 - ▶ <メモリ浪費>や<演算性能低下>の要因に
3. ソースコードが読みにくくなる
 - ▶ BLASのインタフェースを熟知しないと、かえって処理が理解できない
 - まあ、再利用性・性能とのトレードオフでしょうが

GOTO BLASとは

- ▶ 後藤和茂 氏により開発された、ソースコードが無償入手可能な、高性能BLASの実装(ライブラリ)
 - ▶ 特徴
 - ▶ マルチコア対応がなされている
 - ▶ 多くのコモディティハードウェア上の実装に特化
 - ▶ Intel Nehalem and Atom systems
 - ▶ VIA Nanoprocessor
 - ▶ AMD Shanghai and Istanbul
- 等
- ▶ テキサス大学先進計算センター(TACC)で、GOTO BLAS2として、ソースコードを配布している
 - ▶ HP: <http://www.tacc.utexas.edu/tacc-projects/gotoblas2/>

LAPACK

- ▶ 密行列に対する、
連立一次方程式の解法、
および固有値の解法の
“標準”アルゴリズムルーチンを
無償で提供
- ▶ その道の大学の専門家が集結
 - ▶ カリフォルニア大バークレー校：
James Demmel教授
 - ▶ テネシー大ノックスビル校：
Jack Dongarra教授
- ▶ HP
<http://www.netlib.org/lapack/>



LAPACKの命名規則

▶ 命名規則： 関数名：**XYYZZZ**

▶ **X**: データ型

S:単精度、D:倍精度、C:複素、Z:倍精度複素

▶ **YY**: 行列の型

BD: 二重対角、DI: 対角、GB: 一般帯行列、GE: 一般行列、
HE: 複素エルミート、HP: 複素エルミート圧縮形式、SY: 対称
行列、...

▶ **ZZZ**: 計算の種類

TRF: 行列の分解、TRS: 行列の分解を使う、CON: 条件数
の計算、RFS: 計算解の誤差範囲を計算、TRI: 三重対角行
列の分解、EQU: スケーリングの計算、...

インタフェース例：DGESV (1 / 3)

▶ DGESV

(N, NRHS, A, LDA, IPIVOT, B, LDB, INFO)

- ▶ $A X = B$ の解の行列 X を計算をする
- ▶ $A * X = B$ 、ここで A は $N \times N$ 行列で、 X と B は $N \times NRHS$ 行列とする。
- ▶ 行交換の部分枢軸選択付きのLU分解で A を $A = P * L * U$ と分解する。ここで、 P は交換行列、 L は下三角行列、 U は上三角行列である。
- ▶ 分解された A は、連立一次方程式 $A * X = B$ を解くのに使われる。

▶ 引数

▶ N (入力) – INTEGER

- ▶ 線形方程式の数。行列 A の次元数。 $N \geq 0$ 。

インタフェース例：DGESV (2 / 3)

▶ NRHS (入力) – INTEGER

- ▶ 右辺ベクトルの数。行列Bの次元数。NRHS ≥ 0 。

▶ A (入力／出力) – DOUBLE PRECISION, DIMENSION(:, :)

- ▶ 入力時は、 $N \times N$ の行列Aの係数を入れる。
- ▶ 出力時は、Aから分解された行列Lと $U = P * L * U$ を圧縮して出力する。
Lの対角要素は1であるので、収納されていない。

▶ LDA (入力) – INTEGER

- ▶ 配列Aの最初の次元の大きさ。LDA $\geq \max(1, N)$ 。

▶ IPIVOT (出力) – DOUBLE PRECISION, DIMENSION(:)

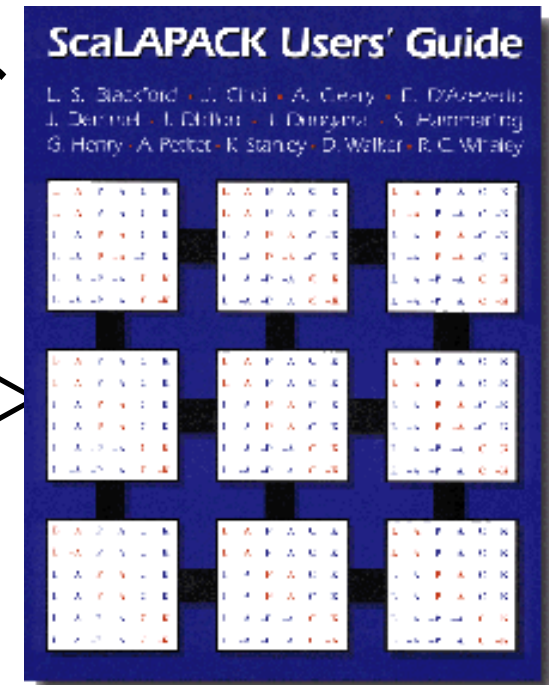
- ▶ 交換行列Aを構成する枢軸のインデックス。行列のi行がIPIVOT(i)行と交換されている。

インタフェース例：DGESV (3 / 3)

- ▶ **B (入力／出力) – DOUBLE PRECISION, DIMENSION(:,:)**
 - ▶ 入力時は、右辺ベクトルの $N \times \text{NRHS}$ 行列Bを入れる。
 - ▶ 出力時は、もし、 $\text{INFO} = 0$ なら、 $N \times \text{NRHS}$ 行列である解行列Xが戻る。
- ▶ **LDB (入力) – INTEGER**
 - ▶ 配列Bの最初の次元の大きさ。 $\text{LDB} \geq \max(1, N)$ 。
- ▶ **INFO (出力) – INTEGER**
 - ▶ $= 0$: 正常終了
 - ▶ < 0 : もし $\text{INFO} = -i$ なら i -th 行の引数の値がおかしい。
 - ▶ > 0 : もし $\text{INFO} = i$ なら $U(i,i)$ が厳密に0である。分解は終わるが、Uの分解は特異なため、解は計算されない。

ScaLAPACK

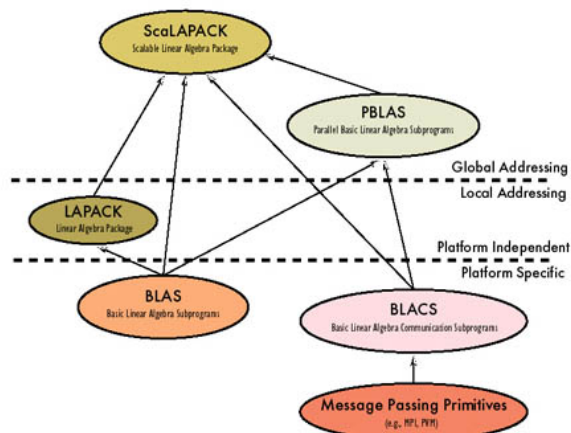
- ▶ 密行列に対する、連立一次方程式の解法、および固有値の解法の“標準”アルゴリズムルーチンの並列化版を無償で提供
- ▶ ユーザインタフェースはLAPACKに<類似>
- ▶ ソフトウェアの<階層化>がされている
 - ▶ 内部ルーチンはLAPACKを利用
 - ▶ 並列インタフェースはBLACS
- ▶ データ分散方式に、2次元ブロック・サイクリック分散方式を採用
- ▶ HP: <http://www.netlib.org/scalapack/>



ScaLAPACKソフトウェア構成図

ScaLAPACK

A Software Library for Linear Algebra Computations on Distributed-Memory Computers



AVAILABLE SOFTWARE:

Dense, Band, and Tridiagonal Linear Systems

- general
- symmetric positive definite

Full-Rank Linear Least Squares

Standard and Generalized

Orthogonal Factorizations

Eigensolvers

- SEP: Symmetric Eigenproblem
- NEP: Nonsymmetric Eigenproblem
- GSEP: Generalized Symmetric Eigenproblem

SVD

Prototype Codes

- HPF interface to ScaLAPACK
- Matrix Sign Function for Eigenproblems
- Out-of-core solvers (LU, Cholesky, QR)
- Super LU
- PBLAS (algorithmic blocking and no alignment restrictions.)

DOCUMENTATION:

ScaLAPACK Users' Guide

http://www.netlib.org/scalapack/slug/scalapack_slug.html

Future Work

- Out-of-core Eigensolvers
- Divide and Conquer routines
- C++ and Java Interfaces

Commercial Use

ScaLAPACK has been incorporated into the following software packages:

- NAG Numerical Library
- IBM Parallel ESSL
- SGI Cray Scientific Software Library

and is being integrated into the VNI IMSL Numerical Library, as well as software libraries for Fujitsu, HP/Convex, Hitachi, and NEC.

<http://www.netlib.org/scalapack/>

(参照) <http://www.netlib.org/scalapack/poster.html>

UT The University of Tennessee

ornl Oak Ridge National Laboratory

BLACSとPBLAS

▶ BLACS

- ▶ ScaLAPACK中で使われる通信機能を関数化したもの。
- ▶ 通信ライブラリは、MPI、PVM、各社が提供する通信ライブラリを想定し、ScaLAPACK内でコード修正せずに使うことを目的とする
 - ▶ いわゆる、通信ライブラリのラッパー的役割でScaLAPACK内で利用
- ▶ 現在、MPIがデファクトになったため、MPIで構築されたBLACSのみ、現実的に利用されている。
 - ▶ なので、ScaLAPACKはMPIでコンパイルし、起動して利用する

▶ PBLAS

- ▶ BLACSを用いてBLASと同等な機能を提供する関数群
- ▶ 並列版BLASといってよい。

ScaLAPACKの命名規則

- ▶ 原則:
LAPACKの関数名の頭に“P”を付けたもの
- ▶ そのほか、BLACS、PBLAS、データ分散を制御するためのScaLAPACK用関数がある。

インタフェース例：PDGESV (1 / 4)

▶ PDGESV

(N, NRHS, A, IA, JA, DESCA, IPIV, B, IB, JB, DESCB, INFO)

- ▶ $sub(A) X = sub(B)$ の解の行列 X を計算をする
- ▶ ここで $sub(A)$ は $N \times N$ 行列を分散した $A(IA:IA+N-1, JA:JA+N-1)$ の行列
- ▶ X と B は $N \times NRHS$ 行列を分散した $B(IB:IB+N-1, JB:JB+NRHS-1)$ の行列
- ▶ 行交換の部分枢軸選択付きのLU分解 で $sub(A)$ を $sub(A) = P * L * U$ と分解する。ここで、 P は交換行列、 L は下三角行列、 U は上三角行列である。
- ▶ 分解された $sub(A)$ は、連立一次方程式 $sub(A) * X = sub(B)$ を解くのに使われる。

インタフェース例：PDGESV (2 / 4)

- ▶ **N (大域入力) – INTEGER**
 - ▶ 線形方程式の数。行列Aの次元数。 $N \geq 0$ 。
- ▶ **NRHS (大域入力) – INTEGER**
 - ▶ 右辺ベクトルの数。行列Bの次元数。 $NRHS \geq 0$ 。
- ▶ **A (局所入力／出力) – DOUBLE PRECISION, DIMENSION(:, :)**
 - ▶ 入力時は、 $N \times N$ の行列Aの局所化された係数を配列A(LLD_A, LOCc(JA+N-1))を入れる。
 - ▶ 出力時は、Aから分解された行列Lと $U = P * L * U$ を圧縮して出力する。Lの対角要素は1であるので、収納されていない。
- ▶ **IA (大域入力) – INTEGER** : $sub(A)$ の最初の行のインデックス
- ▶ **JA (大域入力) – INTEGER** : $sub(A)$ の最初の列のインデックス
- ▶ **DESCA (大域かつ局所入力) – INTEGER**
 - ▶ 分散された配列Aの記述子。

インタフェース例：PDGESV (3 / 4)

- ▶ IPIVOT (局所出力) — DOUBLE PRECISION, DIMENSION(:)
 - ▶ 交換行列Aを構成する枢軸のインデックス。行列のi行がIPIVOT(i)行と交換されている。分散された配列(LOC_r(M_A)+MB_A)として戻る。
- ▶ B (局所入力／出力) — DOUBLE PRECISION, DIMENSION(:, :)
 - ▶ 入力時は、右辺ベクトルの $N \times \text{NRHS}$ の行列Bの分散されたものを (LLD_B, LOC_c(JB+NRHS-1))に入れる。
 - ▶ 出力時は、もし、INFO = 0 なら、 $N \times \text{NRHS}$ 行列である解行列Xが、行列Bと同様の分散された状態で戻る。
- ▶ IB(大域入力) — INTEGER
 - ▶ $\text{sub}(B)$ の最初の行のインデックス
- ▶ JB(大域入力) — INTEGER
 - ▶ $\text{sub}(B)$ の最初の列のインデックス
- ▶ DESCB (大域かつ局所入力) — INTEGER
 - ▶ 分散された配列Bの記述子。

インタフェース例：PDGESV (3 / 4)

▶ INFO (大域出力) —INTEGER

- ▶ = 0: 正常終了
- ▶ < 0:
 - もし i 番目の要素が配列で、その j 要素の値がおかしいなら、
 $\text{INFO} = -(i*100+j)$ となる。
 - もし i 番目の要素がスカラーで、かつ、その値がおかしいなら、
 $\text{INFO} = -i$ となる。
- ▶ > 0: もし $\text{INFO} = K$ のとき $U(\text{IA}+K-1, \text{JA}+K-1)$ が厳密に0である。
分解は完了するが、分解された U は厳密に特異なので、
解は計算できない。

サンプルプログラムの実行 (BLAS DGEMM)

UNIX防忘録

- ▶ emacsの起動: emacs 編集ファイル名
 - ▶ ^x ^s (^はcontrol) : テキストの保存
 - ▶ ^x ^c : 終了
(^z で終了すると、スパコンの負荷が上がる。絶対にしないこと。)
 - ▶ ^g : 訳がわからなくなったとき。
 - ▶ ^k : カーソルより行末まで消す。消した行は一時記憶される。
 - ▶ ^y : ^kで消した行を、現在のカーソルの場所にコピーする。
 - ▶ ^s 文字列 : 文字列の箇所まで移動する。
 - ▶ ^M x goto-line : (^MはESC) 指定した行まで移動する。

UNIX防忘録

- ▶ **rm ファイル名** : ファイル名のファイルを消す。
 - ▶ **rm ***~ : test.c~ などの、~がついたバックアップファイルを消す。
- ▶ **ls** : 現在いるフォルダの中身を見る。
- ▶ **cd フォルダ名** : フォルダに移動する。
 - ▶ **cd ..** : 一つ上のフォルダに移動。
 - ▶ **cd ~** : ルートディレクトリに行く。訳がわからなくなったとき。
- ▶ **cat ファイル名** : ファイル名の中身を見る
- ▶ **make** : 実行ファイルを作る (Makefile があるところ
でしか実行できない)
 - ▶ **make clean** : 実行ファイルを消す。

BLAS DGEMMサンプルプログラムの注意点

- ▶ C言語版、Fortran言語版のファイル名（共通）

`lecBLAS.tar`

- ▶ ジョブスクリプトファイル`mat-mat-blas.bash`
中のキュー名を

`lecture` から `tutorial` に変更してから

`qsub` してください。

- ▶ `lecture` : 実習時間外のキュー（同時実行数1）
- ▶ `tutorial` : 実習時間内のキュー（同時実行数4+）

BLAS DGEMMのサンプルプログラムの実行 (C言語版)

- ▶ 以下のコマンドを実行する

```
$ cp /home/z30082/lecBLAS.tar ./
```

```
$ tar xvf lecBLAS.tar
```

```
$ cd Mat-Mat-BLAS
```

```
$ cd C
```

```
$ make
```

```
$ qsub mat-mat-blas.bash
```

- ▶ 実行が終了したら、以下を実行する

```
$ cat mat-mat-blas.out
```

BLAS DGEMMのサンプルプログラムの実行 (C言語版)

▶ 以下のような結果が見えれば成功

N = 1000

Mat-Mat time = 0.885865 [sec.]

2257.680346 [MFLOPS]

OK!

BLAS DGEMMのサンプルプログラムの実行 (Fortran言語版)

- ▶ 以下のコマンドを実行する

```
$ cp /home/z30082/lecBLAS.tar ./
```

```
$ tar xvf lecBLAS.tar
```

```
$ cd Mat-Mat-BLAS
```

```
$ cd F
```

```
$ make
```

```
$ qsub mat-mat-blas.bash
```

- ▶ 実行が終了したら、以下を実行する

```
$ cat mat-mat-blas.out
```


BLAS DGEMMのサンプルプログラムの実行 (Fortran言語版)

▶ 以下のような結果が見えれば成功

N = 1000

Mat-Mat time[sec.] = 0.853669448999999969

MFLOPS = 2342.82718831429702

OK!

サンプルプログラムの説明（C言語）

- ▶ `#define N 1000`

の、数字を変更すると、行列サイズが変更できます

- ▶ `#define DEBUG 1`

「1」にすると、行列-行列積の演算結果が検証できます。

- ▶ `MyMatMat`関数の仕様

- ▶ Double型 $N \times N$ 行列AとBの行列積をおこない、Double型 $N \times N$ 行列Cにその結果が入ります

Fortran言語のサンプルプログラムの注意

- ▶ 行列サイズNNの宣言は、以下のファイルにあります。

mat-mat-blas.inc

- ▶ 行列サイズ変数が、NNとなっています。

integer NN

parameter (NN=1000)

GOTO BLAS呼び出しオプション

- ▶ 日立コンパイラから、GOTO BLASを呼び出す場合、以下のオプションを付けます。

●C言語

cc <プログラム名> **-L/opt/itc/lib -lgoto**

●Fortran言語

f90 <プログラム名> **-L/opt/itc/lib -lgoto**

※任意数のスレッド並列版(ノード内)を利用する場合は **-lgoto_smp**
16スレッド限定版(ノード内)を利用する場合は **-lgoto_smp16 -lnuma**
を、-lgotoの代わりに付けてください

サンプルプログラムの説明 (BLAS)

- ▶ **1コア(逐次)実行版です**
- ▶ スレッド並列化版は、対応するスレッド並列化版をリンクしてコンパイルの上、並列実行数の指定をする必要があります。
- ▶ GOTO BLASでは、OpenMPのスレッド数指定法と同じ方法で、実行するスレッド数が指定できます
 - ▶ **OMP_NUM_THREADS**環境変数に実行スレッド数を入れる

演習課題 1 (BLAS)

1. **MyMatMat**関数(手続き)の行列積コードを、BLAS DEGMMルーチンの呼び出しにより高速化してください
 - ▶ 引数の並びに注意してください。
 - ▶ C言語は、DGEMM のFortran手続きを呼び出します。以下に注意してください。
 - ▶ 関数名: DGEMM_
 - ▶ 全ての引数が **ポインタ引き渡し**

演習課題 2 (BLAS)

2. スレッド並列版のDGEMMを呼び出し、
いろいろなスレッド数で実行してください。
また逐次実行に比べ、どれだけ高速化され
たか、性能評価をしてください。

BLAS DGEMM回答

BLAS DGEMMの回答 (C言語版)

```
double ALPHA, BETA;  
char TEX[1] = {'N'};  
  
ALPHA=1.0;  
BETA=1.0;  
dgemm_(&TEX, &TEX, &n, &n, &n, &ALPHA,  
      A, &n, B, &n, &BETA, C, &n);
```

BLAS DGEMMの回答 (Fortran言語版)

double precision ALPHA,BETA

ALPHA=1.0d0

BETA=1.0d0

CALL DGEMM('N', 'N', n, n, n, ALPHA,
& A, n, B, n, BETA, C, n)

参考文献（１）

1. BLAS

<http://www.netlib.org/blas/>

2. LAPACK

<http://www.netlib.org/lapack/>

3. ScaLAPACK

<http://www.netlib.org/scalapack/>

4. スパースBLAS

<http://math.nist.gov/spblas/>

参考文献（２）

1. MPI並列プログラミング、P.パチェコ 著 ／ 秋葉 博 訳
2. 並列プログラミング虎の巻MPI版、青山幸也 著、
理化学研究所情報基盤センタ
(<http://accc.riken.jp/HPC/training/text.html>)
3. Message Passing Interface Forum
(<http://www.mpi-forum.org/>)
4. MPI-Jメーリングリスト
(<http://phase.hpcc.jp/phase/mpi-j/ml/>)
5. 並列コンピュータ工学、富田眞治著、昭晃堂(1996)
6. 並列数値処理 ー高速化と性能向上のためにー、
金田康正 編著、コロナ社(2010)

プログラム実習Ⅱ (LAPACK, ScaLAPACK) (演習)

東京大学情報基盤センター 准教授 片桐孝洋

2011年12月22日(木) 10:30ー12:30

演習内容

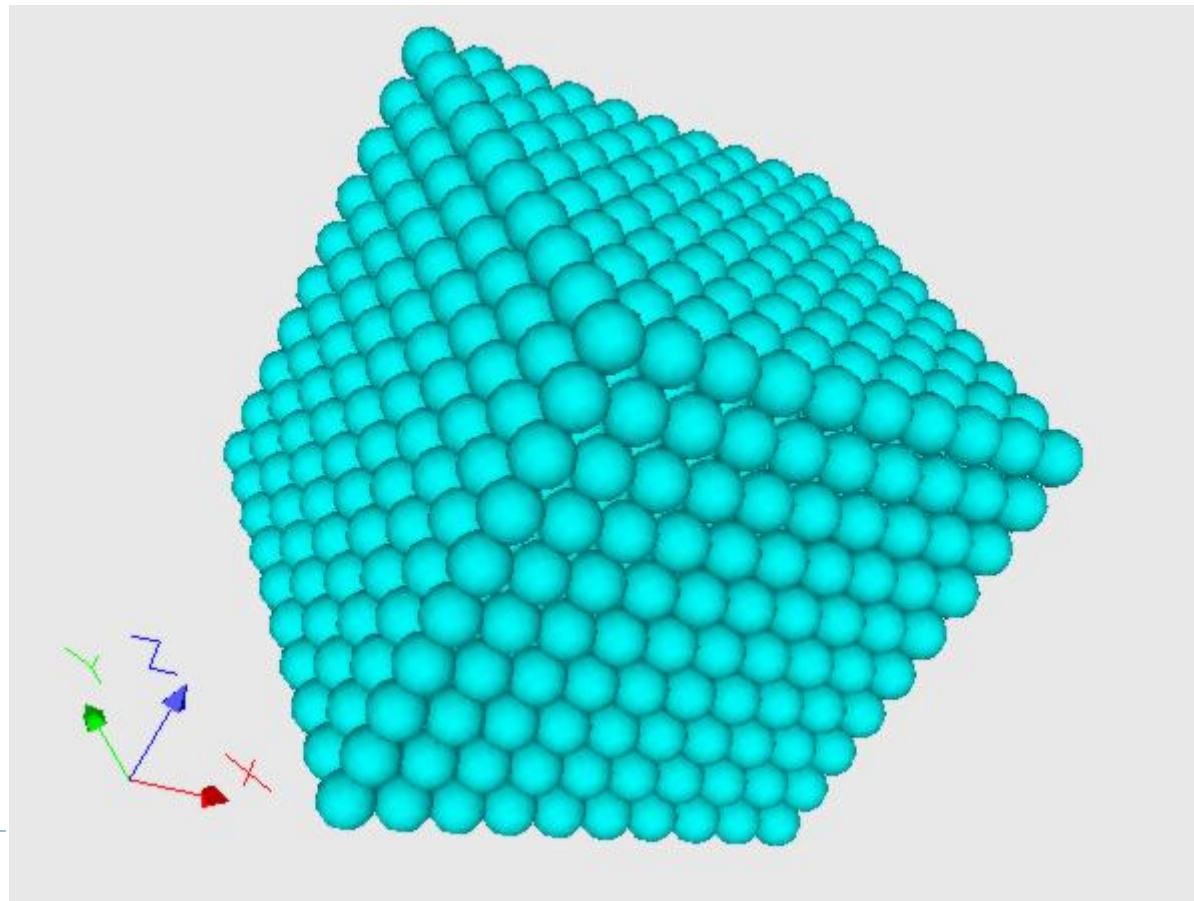
- ▶ 粒子間熱伝導問題の説明(座学)
- ▶ LAPACKの利用法と演習
(C言語、Fortran言語)
- ▶ ScaLAPACKの利用法と演習
(Fortran言語のみ)

粒子間熱伝導問題

- ▶ 東京大学情報基盤センター 中島研吾教授から提供頂いた、PPTとサンプルプログラムを利用
- ▶ 詳細資料
 - ▶ <http://nkl.cc.u-tokyo.ac.jp/09e/CE23/CE23.pdf>

問題設定 (1/5)

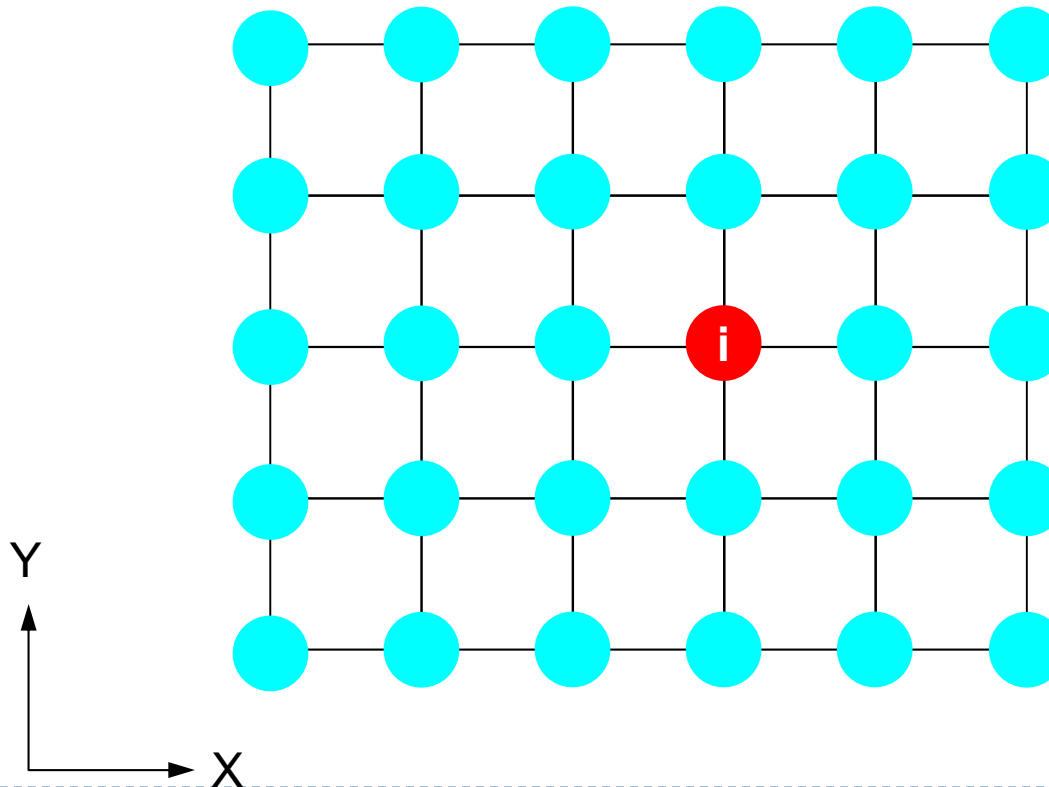
- ▶ 空間上に規則正しく, X, Y, Z 方向に N_X, N_Y, N_Z 個ずつ等間隔 (DX, DY, DZ) に配置された粒子の集合体を考える。



問題設定 (2/5)

粒子*i*に関する熱流束の / 釣り合い

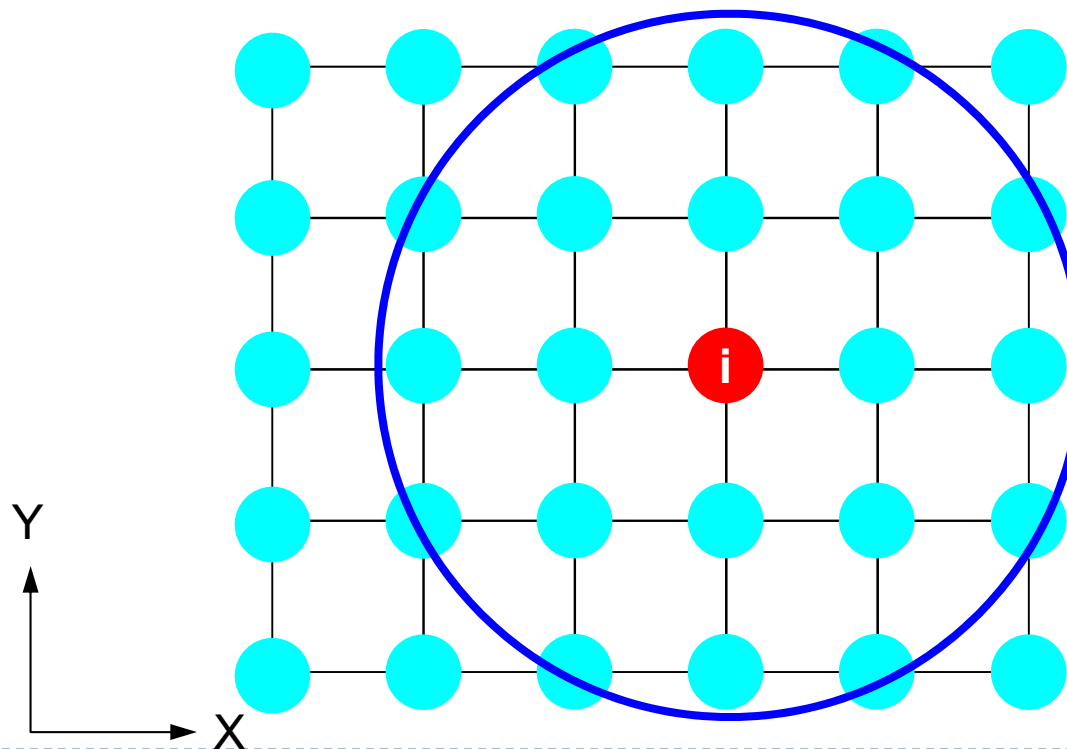
$$\sum_j^{DEL < RADI_{\max}} \frac{AREA}{DEL_{ij} / COND_{ij}} (T_j - T_i) + HCONV_i \cdot SURF \cdot (T_0 - T_i) + QVOL \cdot \bar{V} = 0$$



問題設定 (3/5)

粒子間熱伝導

$$\sum_i^{DEL < RADI_{max}} \frac{AREA}{DEL_{ij} / COND_{ij}} (T_j - T_i) + HCONV_i \cdot SURF \cdot (T_0 - T_i) + QVOL \cdot \bar{V} = 0$$

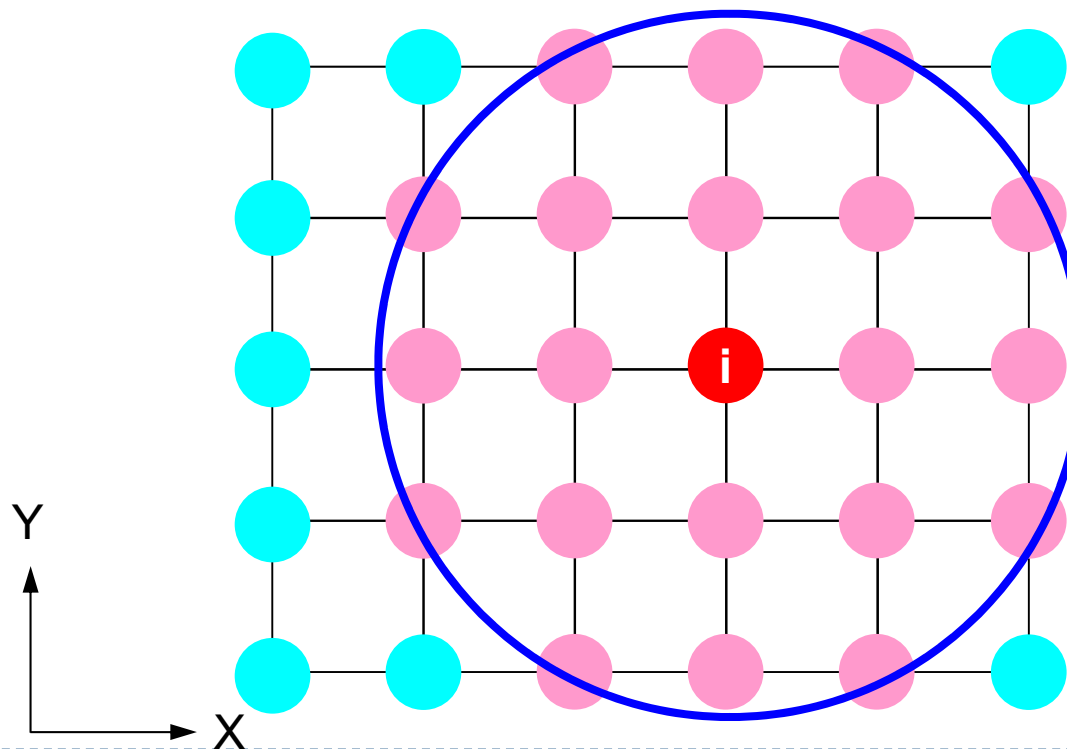


粒子*i*を中心とする,
半径 $RADI_{max}$ の球(円)

問題設定 (3/5)

粒子間熱伝導

$$\sum_i^{DEL < RADI_{max}} \frac{AREA}{DEL_{ij} / COND_{ij}} (T_j - T_i) + HCONV_i \cdot SURF \cdot (T_0 - T_i) + QVOL \cdot \bar{V} = 0$$



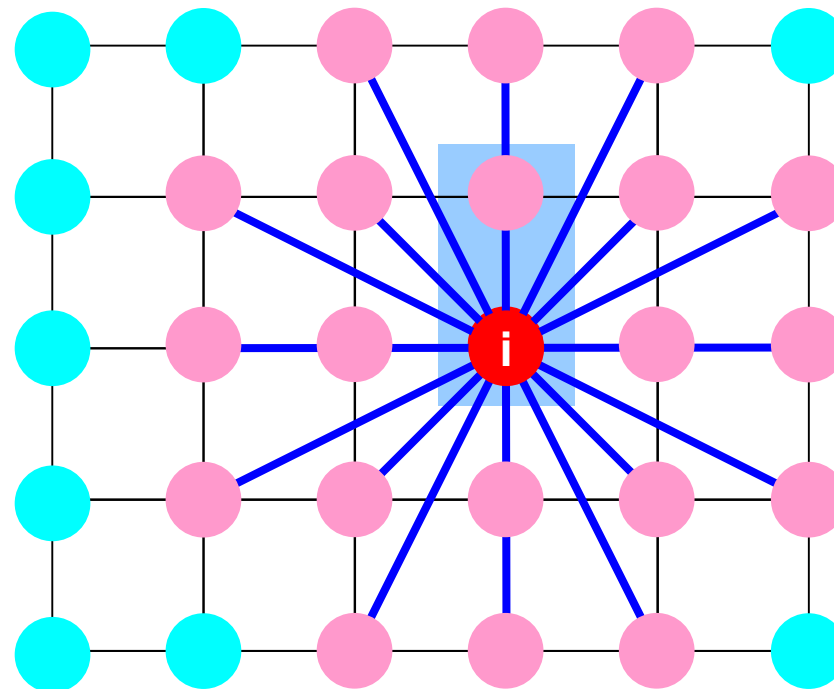
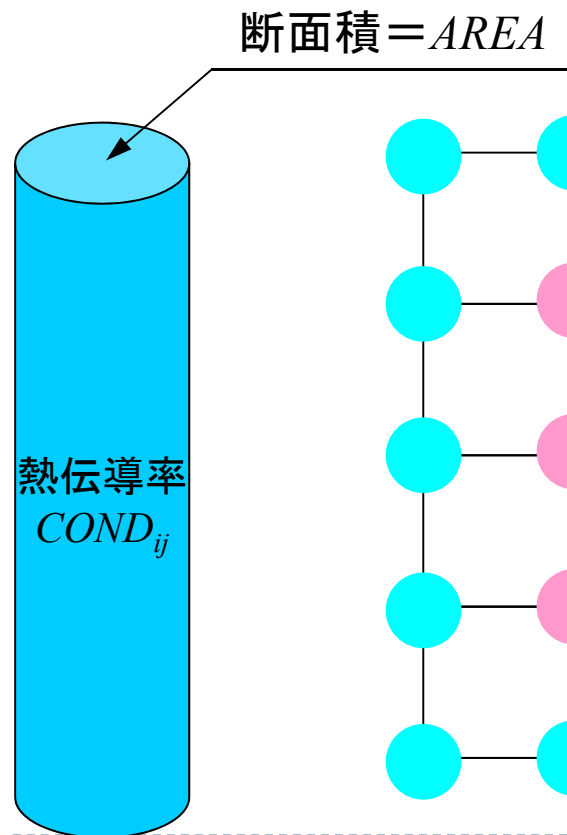
粒子*i*を中心とする、
半径 $RADI_{max}$ の球(円)

粒子間の距離 DEL_{ij} が
 $RADI_{max}$ のよりも小さい
粒子群とのみ熱伝導が
ある。

問題設定 (3/5)

粒子間熱伝導

$$\sum_i^{DEL < RADI_{max}} \frac{AREA}{DEL_{ij} / COND_{ij}} (T_j - T_i) + HCONV_i \cdot SURF \cdot (T_0 - T_i) + QVOL \cdot \bar{V} = 0$$



粒子 i を中心とする,
半径 $RADI_{max}$ の球 (円)

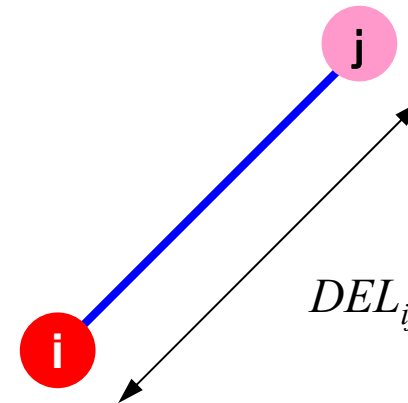
粒子間の距離 DEL_{ij} が
 $RADI_{max}$ のよりも小さい
粒子群とのみ熱伝導が
ある。

長さ DEL , 断面積 $AREA$,
熱伝導率 $COND_{ij}$ の管で
連結

熱伝導率：COND_{ij}

$$\sum_i^{DEL < RADI_{\max}} \frac{AREA}{DEL_{ij} / COND_{ij}} (T_j - T_i) + HCONV_i \cdot SURF \cdot (T_0 - T_i) + QVOL \cdot \bar{V} = 0$$

$$COND_{ij} = \frac{COND0}{\min(10^{DEL}, 10^{20})}$$

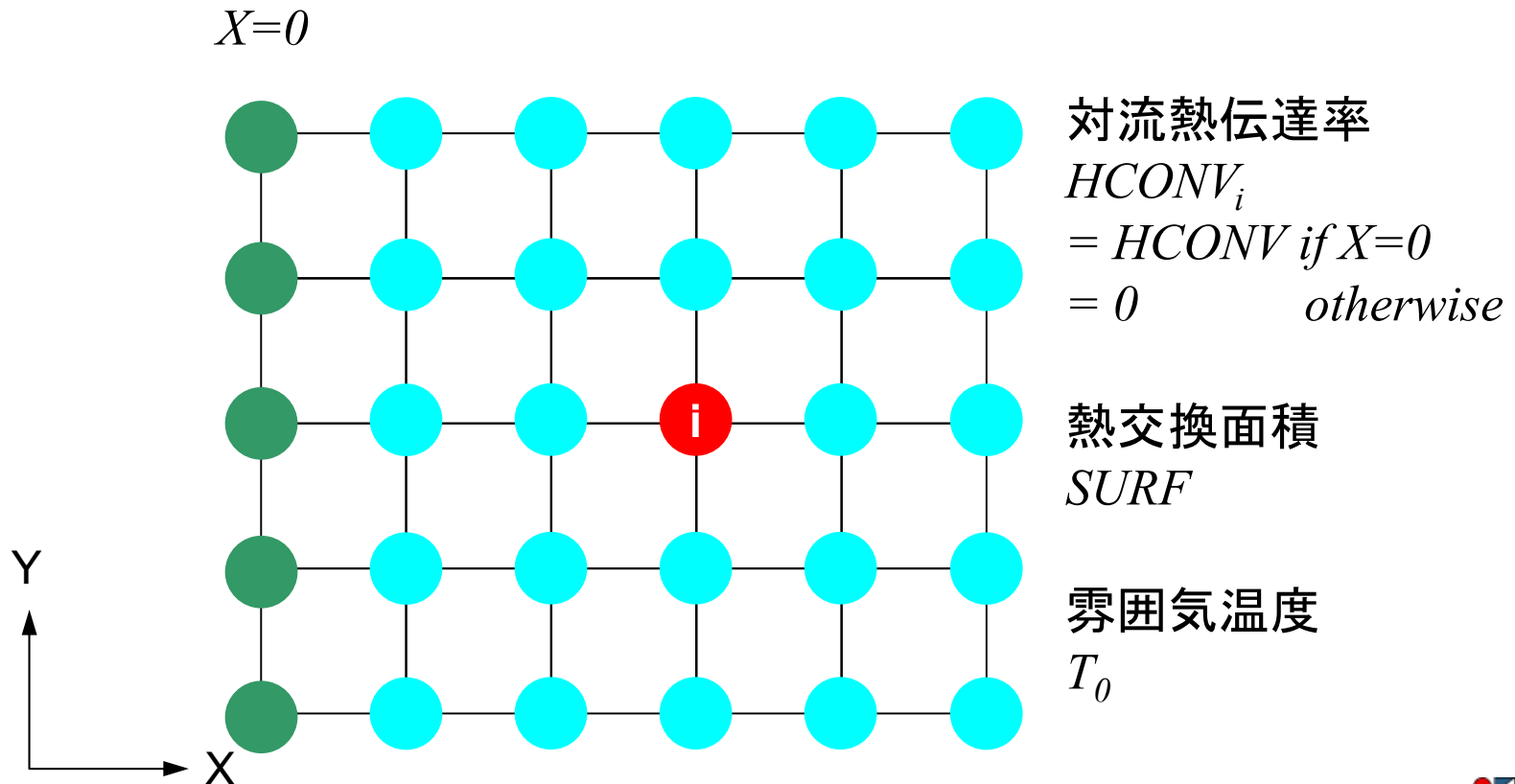


COND0 「基準」熱伝導率

問題設定 (4/5)

対流熱伝達

$$\sum_i^{DEL < RAD I_{\max}} \frac{AREA}{DEL_{ij} / COND_{ij}} (T_j - T_i) + \boxed{HCONV_i \cdot SURF \cdot (T_0 - T_i)} + QVOL \cdot \bar{V} = 0$$



問題設定 (5/5)

体積発熱

$$\sum_i^{DEL < RAD_{\max}} \frac{AREA}{DEL_{ij} / COND_{ij}} (T_j - T_i) + HCONV_i \cdot SURF \cdot (T_0 - T_i) + QVOL \cdot \bar{V} = 0$$

体積発熱量 $QVOL$

発熱体積 $\bar{V}$

$$\bar{V} = C_1 \cdot VOL + C_2 \cdot VOL \cdot DELQ$$

$$DELQ = \sqrt{X_i^2 + Y_i^2 + Z_i^2}$$

C_1, C_2 定数

VOL 各粒子の「基準」体積

$DELQ$ 粒子中心と原点との距離

粒子*i*に関するつりあい

$$\sum_j^{DEL < RAD_{\max}} \frac{AREA}{DEL_{ij} / COND_{ij}} (T_j - T_i) + HCONV_i \cdot SURF \cdot (T_0 - T_i) + QVOL \cdot \bar{V} = 0$$

$$\sum_j^{DEL < RAD_{\max}} \left[\frac{AREA}{DEL_{ij} / COND_{ij}} T_j \right] - \left[\sum_j^{DEL < RAD_{\max}} \frac{AREA}{DEL_{ij} / COND_{ij}} \right] T_i + HCONV_i \cdot SURF \cdot T_0 - HCONV_i \cdot SURF \cdot T_i + QVOL \cdot \bar{V} = 0$$

$$\left[- \sum_j^{DEL < RAD_{\max}} \frac{AREA}{DEL_{ij} / COND_{ij}} - HCONV_i \cdot SURF \right] T_i + \sum_j^{DEL < RAD_{\max}} \left[\frac{AREA}{DEL_{ij} / COND_{ij}} T_j \right]$$

AMAT(i,i) (対角成分)

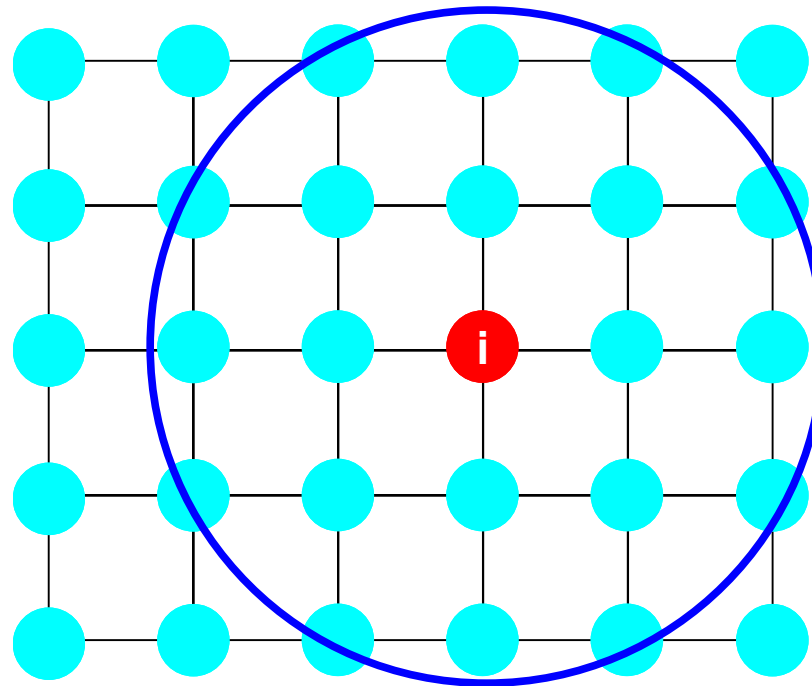
AMAT(i,j) (非対角成分)

$$= -HCONV_i \cdot SURF \cdot T_0 - QVOL \cdot \bar{V}$$

RHS (右辺)

係数行列 AMAT

- ▶ 影響範囲 $RADI_{max}$ が小さければ, 係数行列は疎
 - ▶ 局所的な効果
- ▶ 影響範囲が大きければ, 係数行列は密
 - ▶ 非ゼロ成分の割合が大きくなる



疎行列と密行列： $\{q\}=[A]\{p\}$

疎行列：差分法，有限要素法，有限体積法

```
do i= 1, N
  q(i)= D(i)*p(i)
  do k= index(i-1)+1, index(i)
    q(i)= q(i) + AMATs(k)*p(item(k))
  enddo
enddo
```

密行列：スペクトル法，分子動力学，境界要素法

```
do i= 1, N
  q(i)= 0.d0
  do j= 1, N
    q(i)= q(i) + AMATd(i,j)*p(j)
  enddo
enddo
```

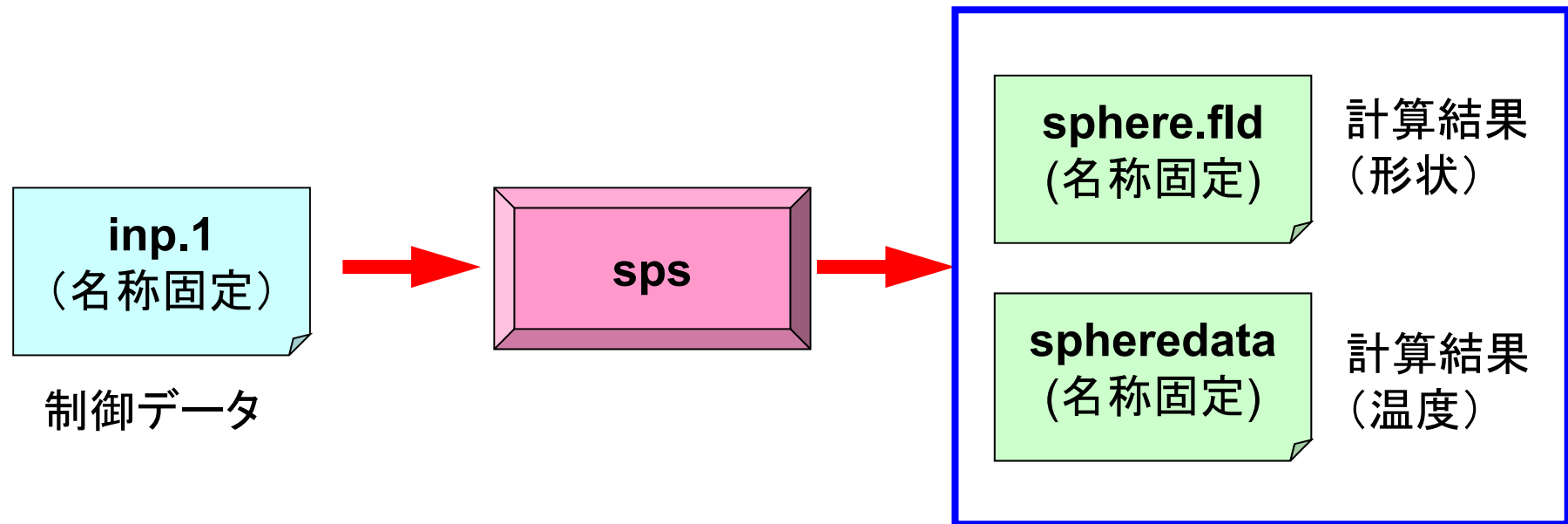
係数行列 AMAT

- ▶ 影響範囲 $RADI_{max}$ が小さければ, 係数行列は疎
 - ▶ 局所的な効果
- ▶ 影響範囲が大きければ, 係数行列は密
 - ▶ 非ゼロ成分の割合が大きくなる
- ▶ 影響範囲が大きくなる場合のことを考えて, プログラムの中では係数行列を「密 (AMATd(i,j))」として扱う。

▶ 問題設定

▶ 1CPU用プログラムの解説

sps: ファイル, データ



制御データ：inp1

10 10 10	NX, NY, NZ
1.e0 1.e0 1.e0	DX, DY, DZ
1.e0 10.e0 1.e0 1.e0	VOL, AREA, QVOL, COND0
1.e24 0.e0 10.e0	HCONV, T0, SURF
8.0e0	RADImax
1.0e0 0.1e0	C1, C2

計算結果（形状）：sphere.fld

*.fldの形式であれば名称は任意

# AVS field file	必須
ndim= 3	三次元モデルであることを示す
dim1= 10	NX
dim2= 10	NY
dim3= 10	NZ
nspace= 3	
veclen= 1	
data= float	
field= uniform	
label= temperature	
variable 1 file= ./spheredata filetype=ascii	温度ファイル名

計算結果（温度）：spheredata

計算結果（形状）からの参照が正しければ名称は任意

```
1.188402E-24  
5.388751E+00  
9.485117E+00  
1.311638E+01  
1.630137E+01
```

...

```
open (22, file='spheredata', status='unknown')  
do i= 1, NX*XY*NZ  
  write (22,'(1pe16.6)') PHI(i)  
enddo
```


シリアル版の計算手順

- ▶ 制御データ入力
- ▶ 粒子生成
- ▶ 係数マトリクス計算
 - ▶ 熱伝導
 - ▶ 対流熱伝達
 - ▶ 発熱
- ▶ CG法による連立一次方程式求解
(オリジナル版 [test_org.f](#), [test_org.c](#))
 - ▶ 密行列
 - ▶ 点ヤコビ前処理
- ▶ 出力
 - ▶ MicroAVS用

test.f：シリアル版 (1/10)

初期設定

```
implicit REAL*8 (A-H,O-Z)

real(kind=8) :: VOL, AREA, QVOL, COND0, COND, RADImax
real(kind=8) :: HCONV, T0, SURF, DEL, DEL0, coef1, coef2
real(kind=8), dimension(:) , allocatable :: XC, YC, ZC
real(kind=8), dimension(:, :) , allocatable :: AMAT
real(kind=8), dimension(:) , allocatable :: RHS
real(kind=8), dimension(:) , allocatable :: PHI
real(kind=8), dimension(:, :) , allocatable :: W

integer :: NX, NY, NZ, N
integer :: R, Z, P, Q, DD

!C
!C +-----+
!C | INIT |
!C +-----+
!C===

open (11, file= 'inp1', status='unknown')
  read (11,*) NX, NY, NZ
  read (11,*) DX, DY, DZ
  read (11,*) VOL, AREA, QVOL, COND0
  read (11,*) HCONV, T0, SURF
  read (11,*) RADImax
  read (11,*) coef1, coef2
close (11)

N= NX*NY*NZ
```

test.f：シリアル版 (2/10)

粒子中心の座標 (XC,YC,ZC)

```
allocate (XC(N), YC(N), ZC(N))

icou= 0
do k= 1, NZ
  do j= 1, NY
    do i= 1, NX
      icou= icou + 1
      XC(icou)= dfloat(i-1)*DX
      YC(icou)= dfloat(j-1)*DY
      ZC(icou)= dfloat(k-1)*DZ
    enddo
  enddo
enddo
!C==
```

粒子の通し番号 ii (1~N)

$ii = (k-1) * NX * NY + (j-1) * NX + i$

test.f：シリアル版 (3/10)

マトリクス生成：熱伝導部分

```
!C
!C +-----+
!C | MATRIX |
!C +-----+
!C ===
      allocate (AMAT(N,N), RHS(N))

      AMAT= 0.d0
      RHS = 0.d0
      do i= 1, N
        do j= 1, N
          if (j.ne.i) then
            DEL= dsqrt((XC(i)-XC(j))**2 + (YC(i)-YC(j))**2
&
            + (ZC(i)-ZC(j))**2)
            if (DEL.le.RADImax) then
              COND= COND0/(10.d0**dmin1(DEL,20.d0))
              coef= COND*AREA / DEL
              AMAT(i,j)= coef
              AMAT(i,i)= AMAT(i,i) - coef
            endif
          endif
        enddo
      enddo
```

$$\left[- \sum_j^{DEL < RADI_{max}} \frac{AREA}{DEL_{ij} / COND_{ij}} - HCONV_i \cdot SURF \right] T_i + \sum_j^{DEL < RADI_{max}} \left[\frac{AREA}{DEL_{ij} / COND_{ij}} T_j \right] = -HCONV_i \cdot SURF \cdot T_0 - QVOL \cdot \bar{V}$$

$$COND_{ij} = \frac{COND0}{\min(10^{DEL}, 10^{20})}$$

test.f：シリアル版 (3/10)

マトリクス生成：熱伝導部分

```
!C
!C +-----+
!C | MATRIX |
!C +-----+
!C ===
      allocate (AMAT(N,N), RHS(N))

      AMAT= 0.d0
      RHS = 0.d0
      do i= 1, N
        do j= 1, N
          if (j.ne.i) then
            DEL= dsqrt((XC(i)-XC(j))**2 + (YC(i)-YC(j))**2
&
            + (ZC(i)-ZC(j))**2)
            if (DEL.le.RADI_max) then
              COND= COND0/(10.d0**dmin1(DEL,20.d0))
              coef= COND*AREA / DEL
              AMAT(i,j)= coef
              AMAT(i,i)= AMAT(i,i) - coef 対角項
            endif
          endif
        enddo
      enddo
```

$$\left[- \sum_j^{\text{DEL} < \text{RADI}_{\text{max}}} \frac{\text{AREA}}{\text{DEL}_{ij} / \text{COND}_{ij}} - \text{HCONV}_i \cdot \text{SURF} \right] T_i + \sum_j^{\text{DEL} < \text{RADI}_{\text{max}}} \left[\frac{\text{AREA}}{\text{DEL}_{ij} / \text{COND}_{ij}} T_j \right] = -\text{HCONV}_i \cdot \text{SURF} \cdot T_0 - \text{QVOL} \cdot \bar{V}$$

test.f：シリアル版 (4/10)

マトリクス生成：体積発熱

```

do i= 1, N
  DELQ= dsqrt(XC(i)**2 + YC(i)**2 + ZC(i)**2)
  RHS(i)= -QVOL*(coef1*VOL + coef2*DELQ*VOL)
enddo

i= 1
do k= 1, NZ
do j= 1, NY
  ic= (k-1)*NX*NY + (j-1)*NX + i
  AMAT(ic,ic)= -HCONV*SURF + AMAT(ic,ic)
  RHS (ic )= -HCONV*SURF*T0 + RHS (ic)
enddo
enddo
!C==
  
```

$$\begin{aligned}
 & \left[- \sum_j^{\text{DEL} < \text{RADI}_{\max}} \frac{\text{AREA}}{\text{DEL}_{ij} / \text{COND}_{ij}} - \text{HCONV}_i \cdot \text{SURF} \right] T_i + \\
 & \sum_j^{\text{DEL} < \text{RADI}_{\max}} \left[\frac{\text{AREA}}{\text{DEL}_{ij} / \text{COND}_{ij}} T_j \right] \\
 & = -\text{HCONV}_i \cdot \text{SURF} \cdot T_0 - \boxed{QVOL \cdot \bar{V}}
 \end{aligned}$$

$$\begin{aligned}
 \bar{V} &= C_1 \cdot \text{VOL} + C_2 \cdot \text{VOL} \cdot \text{DELQ} \\
 \text{DELQ} &= \sqrt{X_i^2 + Y_i^2 + Z_i^2}
 \end{aligned}$$

test.f：シリアル版（4/10）

マトリクス生成：対流熱伝達

```

do i= 1, N
  DELQ= dsqrt(XC(i)**2 + YC(i)**2 + ZC(i)**2)
  RHS(i)= -QVOL*(coef1*VOL + coef2*DELQ*VOL)
enddo

i= 1
do k= 1, NZ
do j= 1, NY
  ic= (k-1)*NX*NY + (j-1)*NX + i
  AMAT(ic,ic)= -HCONV*SURF      + AMAT(ic,ic)
  RHS (ic    )= -HCONV*SURF*T0 + RHS (ic)
enddo
enddo

```

!C==

$$\begin{aligned}
 & \left[- \sum_j^{DEL < RADI_{\max}} \frac{AREA}{DEL_{ij} / COND_{ij}} - \underline{HCONV_i \cdot SURF} \right] T_i - \\
 & \sum_j^{DEL < RADI_{\max}} \left[\frac{AREA}{DEL_{ij} / COND_{ij}} T_j \right] \\
 & = \underline{-HCONV_i \cdot SURF \cdot T_0} - QVOL \cdot \bar{V}
 \end{aligned}$$

前処理付き共役勾配法

Preconditioned Conjugate Gradient Method (CG)

```
Compute  $\mathbf{r}^{(0)} = \mathbf{b} - [\mathbf{A}]\mathbf{x}^{(0)}$ 
for i= 1, 2, ...
    solve  $[\mathbf{M}]\mathbf{z}^{(i-1)} = \mathbf{r}^{(i-1)}$ 
     $\rho_{i-1} = \mathbf{r}^{(i-1)} \mathbf{z}^{(i-1)}$ 
    if i=1
         $\mathbf{p}^{(1)} = \mathbf{z}^{(0)}$ 
    else
         $\beta_{i-1} = \rho_{i-1} / \rho_{i-2}$ 
         $\mathbf{p}^{(i)} = \mathbf{z}^{(i-1)} + \beta_{i-1} \mathbf{p}^{(i-1)}$ 
    endif
     $\mathbf{q}^{(i)} = [\mathbf{A}]\mathbf{p}^{(i)}$ 
     $\alpha_i = \rho_{i-1} / \mathbf{p}^{(i)} \mathbf{q}^{(i)}$ 
     $\mathbf{x}^{(i)} = \mathbf{x}^{(i-1)} + \alpha_i \mathbf{p}^{(i)}$ 
     $\mathbf{r}^{(i)} = \mathbf{r}^{(i-1)} - \alpha_i \mathbf{q}^{(i)}$ 
    check convergence  $|\mathbf{r}|$ 
end
```

前処理: 対角スケーリング

$\mathbf{x}^{(i)}$: ベクトル

α_i : スカラー

test_org.f : シリアル版 (5/10)

CG法①

```
!C
!C +-----+
!C | CG iterations |
!C +-----+
!C===
      EPS= 1.d-08
      allocate (W(N,4), PHI(N))
      W = 0.d0
      PHI= 0.d0

      R = 1
      Z = 2
      Q = 2
      P = 3
      DD= 4
      do i= 1, N
        W(i,DD)= 1.0D0 / AMAT(i,i)
      enddo
```

$W(i,1) = W(i,R) \Rightarrow \{r\}$
 $W(i,2) = W(i,Z) \Rightarrow \{z\}$
 $W(i,2) = W(i,Q) \Rightarrow \{q\}$
 $W(i,3) = W(i,P) \Rightarrow \{p\}$
 $W(i,4) = W(i,DD) \Rightarrow 1/DIAG$

Compute $r^{(0)} = b - [A]x^{(0)}$
for $i = 1, 2, \dots$
 solve $[M]z^{(i-1)} = r^{(i-1)}$
 $\rho_{i-1} = r^{(i-1)} z^{(i-1)}$
 if $i=1$
 $p^{(1)} = z^{(0)}$
 else
 $\beta_{i-1} = \rho_{i-1} / \rho_{i-2}$
 $p^{(i)} = z^{(i-1)} + \beta_{i-1} p^{(i-1)}$
 endif
 $q^{(i)} = [A]p^{(i)}$
 $\alpha_i = \rho_{i-1} / p^{(i)} q^{(i)}$
 $x^{(i)} = x^{(i-1)} + \alpha_i p^{(i)}$
 $r^{(i)} = r^{(i-1)} - \alpha_i q^{(i)}$
 check convergence $|r|$
end

test_org.f: シリアル版 (6/10)

CG法②

```
!C
!C-- {r0}= {b} - [A]{xini} |

      do i= 1, N
        W(i,R) = RHS(i)
        do j= 1, N
          W(i,R) = W(i,R) - AMAT(i,j)*PHI(j)
        enddo
      enddo

      BNRM2= 0.0D0
      do i= 1, N
        BNRM2 = BNRM2 + RHS(i)**2
      enddo

!C*****
      do iter= 1, N
!C
!C-- {z}= [Minv]{r}

        do i= 1, N
          W(i,Z)= W(i,DD) * W(i,R)
        enddo
```

```
Compute  $\mathbf{r}^{(0)} = \mathbf{b} - [\mathbf{A}]\mathbf{x}^{(0)}$ 
for i= 1, 2, ...
  solve  $[\mathbf{M}]\mathbf{z}^{(i-1)} = \mathbf{r}^{(i-1)}$ 
   $\rho_{i-1} = \mathbf{r}^{(i-1)} \cdot \mathbf{z}^{(i-1)}$ 
  if i=1
     $\mathbf{p}^{(1)} = \mathbf{z}^{(0)}$ 
  else
     $\beta_{i-1} = \rho_{i-1} / \rho_{i-2}$ 
     $\mathbf{p}^{(i)} = \mathbf{z}^{(i-1)} + \beta_{i-1} \mathbf{p}^{(i-1)}$ 
  endif
   $\mathbf{q}^{(i)} = [\mathbf{A}]\mathbf{p}^{(i)}$ 
   $\alpha_i = \rho_{i-1} / \mathbf{p}^{(i)} \cdot \mathbf{q}^{(i)}$ 
   $\mathbf{x}^{(i)} = \mathbf{x}^{(i-1)} + \alpha_i \mathbf{p}^{(i)}$ 
   $\mathbf{r}^{(i)} = \mathbf{r}^{(i-1)} - \alpha_i \mathbf{q}^{(i)}$ 
  check convergence |r|
end
```

test_org.f: シリアル版 (7/10)

CG法③

```
!C
!C-- RHO= {r}{z}

      RHO= 0.d0
      do i= 1, N
        RHO= RHO + W(i,R)*W(i,Z)
      enddo

!C
!C-- {p} = {z} if      ITER=1
!C  BETA= RHO / RHO1  otherwise

      if ( iter.eq.1 ) then
        do i= 1, N
          W(i,P)= W(i,Z)
        enddo
      else
        BETA= RHO / RHO1
        do i= 1, N
          W(i,P)= W(i,Z) + BETA*W(i,P)
        enddo
      endif
endif
```

Compute $r^{(0)} = b - [A]x^{(0)}$

for $i = 1, 2, \dots$

 solve $[M]z^{(i-1)} = r^{(i-1)}$

$\rho_{i-1} = r^{(i-1)} z^{(i-1)}$

if $i=1$

$p^{(1)} = z^{(0)}$

else

$\beta_{i-1} = \rho_{i-1} / \rho_{i-2}$

$p^{(i)} = z^{(i-1)} + \beta_{i-1} p^{(i-1)}$

endif

$q^{(i)} = [A]p^{(i)}$

$\alpha_i = \rho_{i-1} / p^{(i)} q^{(i)}$

$x^{(i)} = x^{(i-1)} + \alpha_i p^{(i)}$

$r^{(i)} = r^{(i-1)} - \alpha_i q^{(i)}$

 check convergence $|r|$

end

test_org.f: シリアル版 (8/10)

CG法④

```
!C
!C-- {q}= [A]{p}

      do i= 1, N
        W(i,Q) = 0.d0
        do j= 1, N
          W(i,Q) = W(i,Q) + AMAT(i,j)*W(j,P)
        enddo
      enddo

!C
!C-- ALPHA= RHO / {p}{q}

      C1= 0.d0
      do i= 1, N
        C1= C1 + W(i,P)*W(i,Q)
      enddo
      ALPHA= RHO / C1

!C
!C-- {x}= {x} + ALPHA*{p}
!C   {r}= {r} - ALPHA*{q}

      do i= 1, N
        PHI(i) = PHI(i) + ALPHA * W(i,P)
        W(i,R)= W(i,R) - ALPHA * W(i,Q)
      enddo
```

Compute $r^{(0)} = b - [A]x^{(0)}$

for $i = 1, 2, \dots$

 solve $[M]z^{(i-1)} = r^{(i-1)}$

$\rho_{i-1} = r^{(i-1)} z^{(i-1)}$

if $i=1$

$p^{(1)} = z^{(0)}$

else

$\beta_{i-1} = \rho_{i-1} / \rho_{i-2}$

$p^{(i)} = z^{(i-1)} + \beta_{i-1} p^{(i-1)}$

endif

$q^{(i)} = [A]p^{(i)}$

$\alpha_i = \rho_{i-1} / p^{(i)} q^{(i)}$

$x^{(i)} = x^{(i-1)} + \alpha_i p^{(i)}$

$r^{(i)} = r^{(i-1)} - \alpha_i q^{(i)}$

 check convergence $|r|$

end

test_org.f: シリアル版 (9/10)

CG法⑤

```
DNRM2 = 0.0
do i= 1, N
  DNRM2= DNRM2 + W(i,R)**2
enddo

RESID= dsqrt(DNRM2/BNRM2)

write (*, 1000) iter, RESID
1000  format (i5, 1p16.6)

if ( RESID.le.EPS) goto 900
RHO1 = RHO

enddo
!C*****

IER = 1

900 continue
!C===
```

Compute $r^{(0)} = b - [A]x^{(0)}$

for $i = 1, 2, \dots$

 solve $[M]z^{(i-1)} = r^{(i-1)}$

$\rho_{i-1} = r^{(i-1)} z^{(i-1)}$

if $i=1$

$p^{(1)} = z^{(0)}$

else

$\beta_{i-1} = \rho_{i-1} / \rho_{i-2}$

$p^{(i)} = z^{(i-1)} + \beta_{i-1} p^{(i-1)}$

endif

$q^{(i)} = [A]p^{(i)}$

$\alpha_i = \rho_{i-1} / p^{(i)} q^{(i)}$

$x^{(i)} = x^{(i-1)} + \alpha_i p^{(i)}$

$r^{(i)} = r^{(i-1)} - \alpha_i q^{(i)}$

check convergence |r|

end

test_org.f：シリアル版（10/10）

結果出力

```
!C
!C +-----+
!C | OUTPUT |
!C +-----+
!C===
      N1= 1
      N3= 3
!C
!C-- MESH
      open (22, file='sphere.fld', status='unknown')
      write (22,'(a)')      '# AVS field file'
      write (22,'(a,i5)') 'ndim=', N3
      write (22,'(a,i5)') 'dim1=', NX
      write (22,'(a,i5)') 'dim2=', NY
      write (22,'(a,i5)') 'dim3=', NZ
      write (22,'(a,i5)') 'nspace=', N3
      write (22,'(a,i5)') 'veclen=', N1
      write (22,'(a,i5)') 'data= float'
      write (22,'(a,i5)') 'field= uniform'
      write (22,'(a,i5)') 'label= temperature'
      write (22,'(a,i5)') 'variable 1 file=./spheredata filetype=ascii'
      close (22)
!C
!C-- RESULTS
      open (22, file='spheredata', status='unknown')
      do i= 1, N
        write (22,'(1pe16.6)') PHI(i)
      enddo
!C===
```

サンプルプログラムの実行 (LAPACK dgesv)

LAPACK dgesvサンプルプログラムの注意点

- ▶ C言語版、Fortran言語版のファイル名（共通）

lecLAPACK.tar

- ▶ ジョブスクリプトファイルgo.sh 中のキュー名を

lecture から tutorial に変更してから
qsub してください。

- ▶ lecture : 実習時間外のキュー（同時実行数1）
- ▶ tutorial : 実習時間内のキュー（同時実行数4+）

PGFコンパイラ

(ACMLライブラリ利用のため)のコマンド

- ▶ C言語、Fortran言語ともに、PGFコンパイラを利用するため、以下のコマンドを実行してください。

```
source /opt/itc/mpi/mpiswitch.sh mpich-mx-pgi
```

- なお、サンプルプログラムのファイルに上記コマンドがあります。以下を入力してください。

```
$ cat pgf.sh
```

LAPACK dgesvのサンプルプログラムの実行 (C言語版)

- ▶ 以下のコマンドを実行する

```
$ cp /home/z30082/lecLAPACK.tar ./
```

```
$ tar xvf lecLAPACK.tar
```

```
$ cd sphere-LAPACK
```

```
$ cd C
```

```
$ make
```

```
$ qsub go.sh
```

- ▶ 実行が終了したら、以下を実行する

```
$ cat test.out
```

LAPACK dgesvのサンプルプログラムの実行 (C言語版)

▶ 以下のような結果が見えれば成功

time = 0.000000 [sec.]

inf [MFLOPS]

990 -2.272792e+00

991 -2.276715e+00

992 -2.288410e+00

993 -2.307670e+00

994 -2.334166e+00

995 -2.367479e+00

996 -2.407125e+00

997 -2.452584e+00

998 -2.503330e+00

999 -2.558846e+00

err = 6.274235e+02

連立一次方程式求解部分が
実装されて無いので、
時間が0秒、
誤差ERRが大きく
なっていますが、
正常な動作です。

LAPACK dgesvのサンプルプログラムの実行 (Fortran言語版)

- ▶ 以下のコマンドを実行する

```
$ cp /home/z30082/lecLAPACK.tar ./
```

```
$ tar xvf lecLAPACK.tar
```

```
$ cd sphere-LAPACK
```

```
$ cd F
```

```
$ make
```

```
$ qsub go.sh
```

- ▶ 実行が終了したら、以下を実行する

```
$ cat test.out
```

LAPACK dgesvのサンプルプログラムの実行 (Fortran言語版)

▶ 以下のような結果が見えれば成功

TIME[sec] = 9.9999999999999995E-007

MFLOPS = 670168000.0000000

991 -2.272792E+00

992 -2.276715E+00

993 -2.288410E+00

994 -2.307670E+00

995 -2.334166E+00

996 -2.367479E+00

997 -2.407125E+00

998 -2.452584E+00

999 -2.503330E+00

1000 -2.558846E+00

EPS = 627.4235113914224

連立一次方程式求解部分が
実装されて無いので、
時間が極端に短く、
誤差ERRが大きく
なっていますが、
正常な動作です。

サンプルプログラムの説明 (LAPACK)

- ▶ **1コア(逐次)実行版です**
- ▶ スレッド並列化版は、スレッド並列化版をリンクしてコンパイルの上、並列実行数の指定をする必要があります。
- ▶ LAPACKはスレッド並列化のみ対応しているため、複数ノードを通信しつつ利用することはできません
 - ▶ 通信しつつ利用するには、**分散版であるScaLAPACK**を利用します
 - ▶ ノード内のみLAPACKを使い、ノード間はMPIで並列化するような使い方は可能です
 - ▶ たとえば、領域分割法を利用し、ノード内のみLAPACKで連立一次方程式を解く場合

サンプルプログラムの説明 (LAPACK)

- ▶ 誤差ERRの計算は, $10 \times 10 \times 10$ の問題に特化されています.
それ以外の問題サイズでは機能しません.

ACML LAPACK呼び出しオプション

▶ 以下のオプションを付けます。

●C言語

pgcc <プログラム名>

-lacml -lpgftnrtl -pgf90libs

※C言語からFortranのACMLライブラリが提供するLAPACK手続きを呼び出すため、f90ランタイムライブラリの指定が必要です

●Fortran言語

pgf95 <プログラム名> **-lacml**

演習課題1 (LAPACK)

1. `test.c` もしくは `test.f` のメイン関数(手続き)の連立一次方程式求解部分を、LAPACK `dgesv` ルーチンの呼び出しにより、高速化してください。
 - ▶ 引数の並びに注意してください。
 - ▶ C言語は、`dgesv` のFortran手続きの呼び出しになります。以下に注意してください。
 - ▶ 関数名: `dgesv_`
 - ▶ 全ての引数がポインタ引き渡し
 - ▶ デバッグとして、誤差(ERR)が十分小さいことを確認してください。

演習課題2 (LAPACK)

2. CG法による解法ルーチン[test_org.c](#)もしくは[test_org.f](#) をコンパイルして、LAPACK版と実行速度を比べてください。
3. 問題サイズを大きくして、LAPACK版、CG法版の実行速度を比べてください。
 - ▶ NX, NY, NZの値、および、計算打ち切り半径RADImaxを適切に設定してください。
 - ▶ RADImaxの値が小さいと、CG法が有利（高速）になる可能性があります。

演習課題 3 (LAPACK)

4. 日立コンパイラからLAPACKを呼び出し、BLASとしてGOTO BLASのスレッド並列版を呼び出すように変更してください。
 - ▶ 上記の16並列までのスレッド版LAPACKを利用し、性能評価を行ってください。
 - ▶ PGIコンパイラ環境からデフォルト環境に戻す必要があります。

LAPACK dgesv回答

LAPCK dgesvの回答 (C言語版)

```
dgesv_(&nn, &inc, amat2, &nn,  
      piv, rhs, &nn, &info);
```

LAPCK dgesvの回答 (Fortran言語版)

```
call DGESV(N, INC, AMAT, N,  
&          PIV, RHS, N, INFO)
```

サンプルプログラムの実行 (ScaLAPACK pdgesv)

ScaLAPACK pdgesvサンプルプログラムの 注意点

- ▶ Fortran言語版のファイル名

lecScaLAPACK.tar

※ScaLAPACKはC言語版のサンプル
はありません

- ▶ ジョブスクリプトファイルgo.sh 中のキュー名を
lecture から tutorial に変更してから
qsub してください。

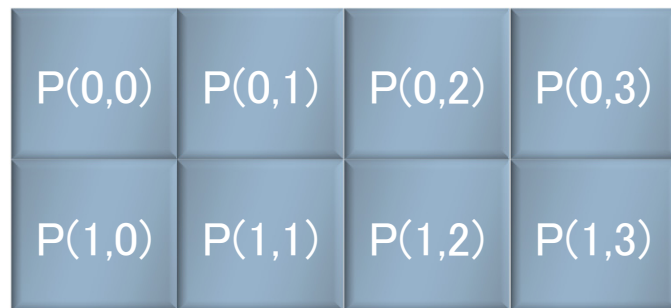
- ▶ lecture : 実習時間外のキュー(同時実行数1)
- ▶ tutorial : 実習時間内のキュー(同時実行数4+)

ScaLAPACKにおけるプロセッサ・グリッド

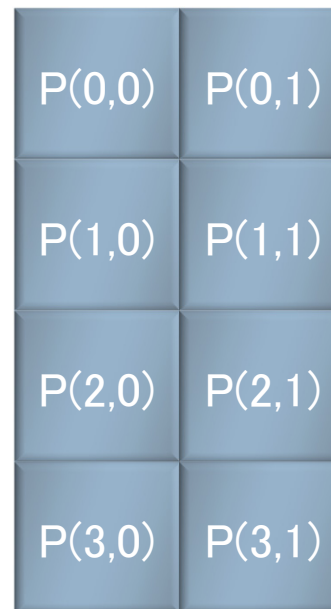
- ▶ MPIで起動する総プロセス数は、プロセッサ・グリッドと呼ばれる2次元プロセッサ構造で管理されます。

- ▶ 例: 8プロセス

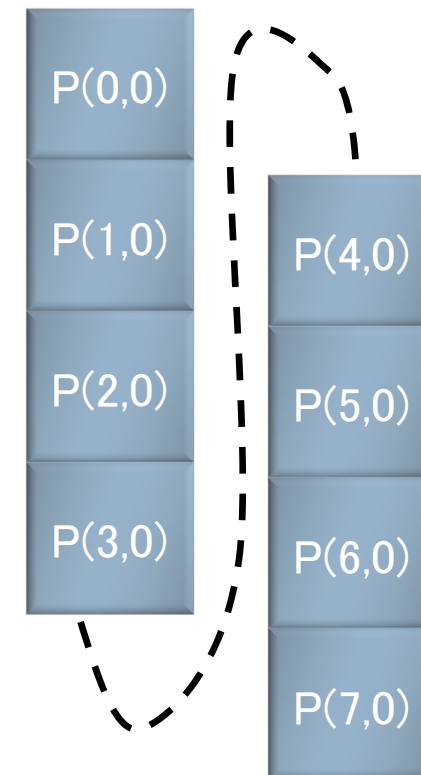
● 2×4 構成



● 4×2 構成



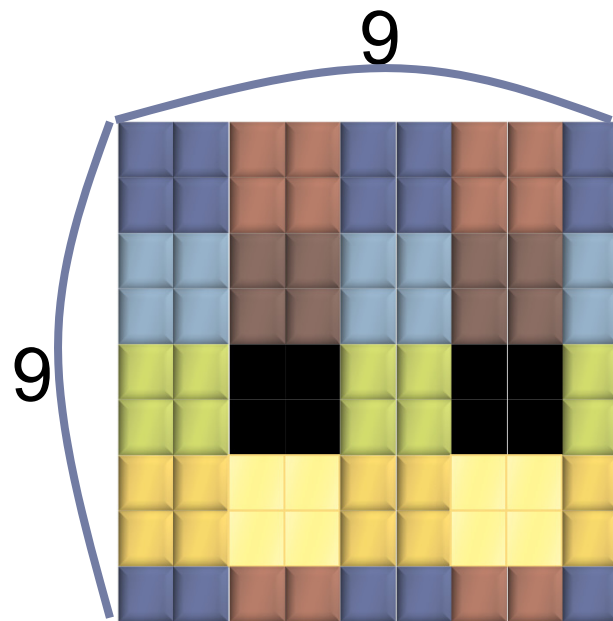
● 8×1 構成



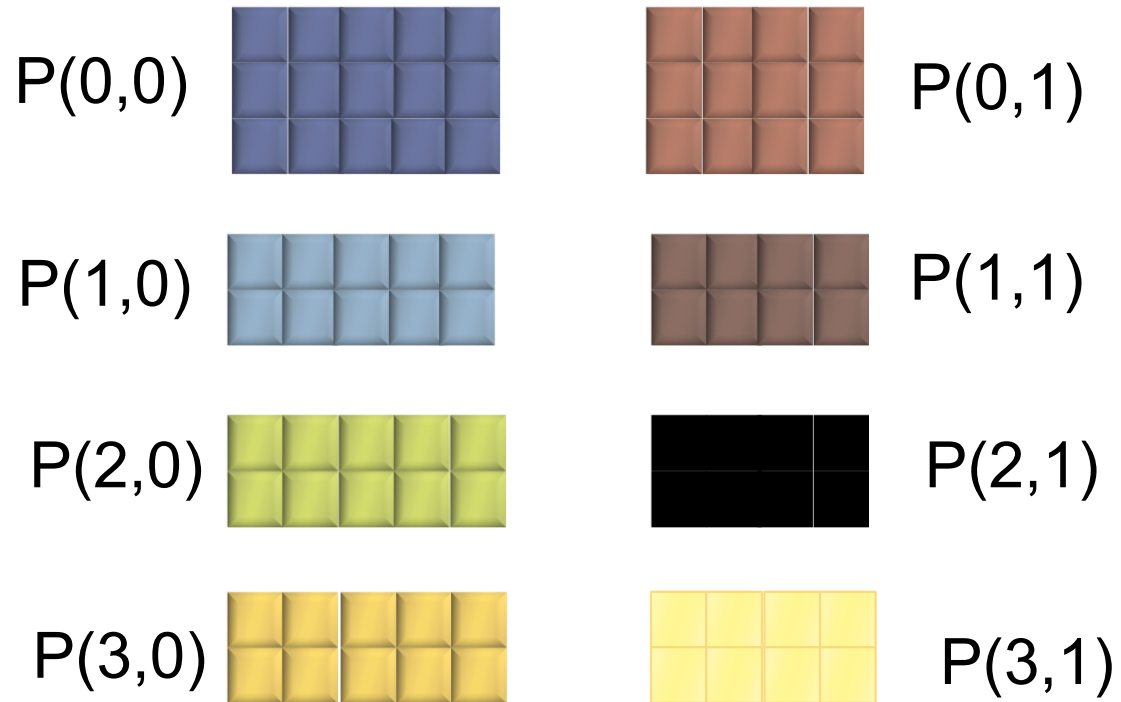
ScaLAPACKにおけるデータ分散

- ▶ ブロック幅MBの2次元ブロックサイクリック分散となります
- ▶ 例: 8プロセス(2×4プロセッサ・グリッド)、MB=2

※行列サイズで割り切れないプロセス数の場合も考慮して、
sub(A)の確保領域を計算する必要があります



大域ビュー(行列A)



局所ビュー(sub(A))

コンテキストの定義

●コンテキスト:プロセッサ・グリッドに関する情報体

BLACS_GET(ICONTXT, WHAT, VAL)

●BLACSの内部情報を取得する

●ICONTXT: 入力、整数型、

WHATで指定するコンテキストに設定を試みる値(引数)。
(引数が)無い時は無視される。

●WHAT: 入力、整数型、コンテキストに設定する内容

WHAT = 0 : デフォルトのシステムコンテキスト

WHAT = 1 : BLACS メッセージの ID 幅

WHAT = 2 : コンパイルされるBLACS デバックレベル

WHAT = 10: ICONTXTにより制御されるBLACSコンテキストを定義するために
用いられるシステムコンテキストの参照

WHAT = 11: 現在使っているマルチリング構造のリング数

WHAT = 12: 現在使っている一般化した木構造の枝数

●VAL: 出力、整数型、コンテキスト情報

BLACSグリッドの定義

BLACS_GRIDINIT(ICONTXT, ORDER, NPROW, NPCOL)

● **ICONTXT** : 入力／出力、整数型
コンテキスト

● **ORDER** : 入力、文字型 * 1

プロセスをどのようにBLACSのグリッドに割り当てるか指定

● ‘R’ : 行方向の自然なオーダリングを使う。

● ‘C’ : 列方向の自然なオーダリングを使う。

● そうでないなら : 行方向の自然なオーダリングを使う。

BLACSグリッドの情報入手

BLACS_GRIDINFO

(ICONTXT, NPROW, NPCOL, MYPROW, MYPCOL)

- ICONTXT: 入力、整数型
コンテキスト
- NPROW: 出力、整数型
プロセッサ・グリッドの行数
- NPCOL: 出力、整数型
プロセッサ・グリッドの列数
- MYPROW: 出力、整数型
プロセッサ・グリッドにおける自分の行方向の認識番号
- MYPCOL: 出力、整数型
プロセッサ・グリッドにおける自分の列方向の認識番号

データ分散を容易にする関数

PDELSET(A, IA, JA, DESC, ALPHA)

●大域配列の添え字から、局所配列の適する場所にデータを収納する

●A: 局所出力、倍精度型

収納すべき局所配列

●IA: 大域入力、整数型

大域的配列における1次元目の添え字

●JA: 大域入力、整数型

大域的配列における2次元目の添え字

●DESC: 大域かつ局所入力、整数型配列

局所配列Aの記述子

●ALPHA: 局所入力、倍精度型

代入すべき値

データ分散を容易にする関数:例

大域配列AMATを、適切な局所行列Aに代入

```
DO J = 1, N
  DO I = 1, N
    CALL PDELSET( A, I, J, DESCA, AMAT(I,J))
  ENDDO
  CALL PDELSET( B, J, 1, DESCB, RHS(J))
ENDDO
```

大域ベクトルRHSを、適切な局所ベクトルBに代入

PDELSET関数による方法の注意点

- ▶ PDELSET関数を用いて行列を分散する方法は容易ですが、**サンプルプログラムのように、大域行列Aを全プロセスで所有していると、メモリに関するスケーラビリティが無くなります。**
 - ▶ つまり、実行できる行列サイズNが、1ノードのメモリ総量で決まる。実行ノード数を増加しても、Nを大きくできない。
- ▶ 本格的な並列プログラムを書くためには
 - ▶ **局所ビューの観点で、行列の値を直接sub(A)に値を代入する**
プログラムを書く必要があります。
- ▶ そのためには、ブロック・サイクリック分散方式の特徴を理解して、局所配列の確保をする必要があります
 - ▶ **本講習会のMPI基礎編で、関連技術の演習があります。**

ScaLAPACK pdgesvの サンプルプログラムの実行 (Fortran言語版)

- ▶ 以下のコマンドを実行する

```
$ cp /home/z30082/lecScaLAPACK.tar ./
```

```
$ tar xvf lecScaLAPACK.tar
```

```
$ cd sphere-ScaLAPACK
```

```
$ cd F
```

```
$ make
```

```
$ qsub go.sh
```

- ▶ 実行が終了したら、以下を実行する

```
$ cat test.out
```

ScaLAPACK pdgesvの サンプルプログラムの実行 (Fortran言語版)

▶ 以下のような結果が見えれば成功

TIME[sec] = 0.309944152832031250E-005

MFLOPS = 351361040.384000003

ScaLAPACK Example Program -- Sep, 2010

Solving $Ax=b$ where A is a 1000 by 1000 matrix with
a block size of 32

Running on 64 processes, where the process grid is 8 by 8

INFO code returned by PDGESV = 0

EPS = 627.423511391422494

連立一次方程式求解部分が実装されて無いので、
時間が極端に短く、誤差ERRが大きくなっていますが、
正常な動作です。

サンプルプログラムの説明(ScaLAPACK)

- ▶ **ピュアMPI版です**
 - ▶ スレッド並列を利用したハイブリッドMPI版を利用するには、スレッド並列版をリンクしてコンパイルし、スレッド並列数を指定する必要があります
- ▶ 64プロセス実行(プロセッサー・グリッド 8×8)、問題サイズ1000、ブロック幅32に**特化されています**
 - ▶ プロセス数、プロセッサー・グリッド、問題サイズ、ブロック幅を変更する場合、PARAMETER文の定数を変更する必要があります
- ▶ 誤差ERRの計算は、 $10 \times 10 \times 10$ の問題に特化されています。それ以外の問題サイズでは機能しません。

ScaLAPACK呼び出しオプション

▶ 以下のオプションを付けます。

●Fortran言語

```
mpif90 <プログラム名> -noproparallel  
-lscalapack_sc -llapack_sc  
-lblacsF77_sc -lblacsBASE_sc  
-lblacsC_sc -L/opt/itc/lib -lgoto
```

※日立コンパイラによる、要素並列化されていない(スレッド並列化されていない)
LAPACKとBLASを用いたScaLAPACKの呼び出し手順です。

※BLASは、GOTO BLASを用います。

※MPI通信を用いる版です。

※詳細HA8000利用マニュアル:<http://www.cc.u-tokyo.ac.jp/service/ha8000/>

演習課題1 (ScaLAPACK)

1. `test.f` のメイン手続きの連立一次方程式求解部分を、ScaLAPACK `pdgesv` 手続きの呼び出しにより、高速化してください
 - ▶ 引数の並びに注意してください。
 - ▶ デバッグとして、誤差 (ERR) が十分小さいことを確認してください。

演習課題2 (ScaLAPACK)

2. 問題サイズを大きくして実行速度を比べてください。
3. 並列実行数を64並列から変更して実行してください。
 - ▶ プロセッサー・グリッドを 8×8 から変更する必要があります。
 - ▶ 上記の2、3ともに、データ分散(行列の確保のサイズ)の変更(コードの修正)が必須ですので、注意してください。

演習課題 3 (ScaLAPACK)

4. 大域配列`mat`に大域的な係数を代入せず、局所配列 `A = sub(mat)` に直接、各プロセスで必要な係数を代入するプログラムを作成し、メモリに関するスケーラビリティがあるように、プログラムを改良してください。
 - ▶ 大域配列`mat`の確保は不要となります

ScaLAPACK pdgesv回答

LAPCK dgesvの回答 (Fortran言語版)

```
CALL PDGESV(  
&    NN, NRHS,  
&    A, IA, JA, DESCA, IPIV,  
&    B, IB, JB, DESCRB,  
&    INFO )
```

お疲れさまでした